

委託事業実施内容報告書

平成20年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【ボランティアを対象とした実践的長期研修】

受託団体名 聖徳大学言語文化研究所

1 事業の趣旨・目的

昨今のボランティアによる日本語教育活動においては、従来の成人のための日本語指導に加え、各市教育委員会や小中学校から「子どものための日本語教育」に携わることを要請される機会が多くなってきている。しかし、この分野はその教授法等もまだ開発途上にあり、多くの研究すべき問題を抱えている。

これまで聖徳大学言語文化研究所では、これらに関する検討、研修に協力し、外国人児童の日本語教育研究のプロジェクトも設置している。(財)松戸市国際交流協会日本語ボランティア教室等の協力の下、教員・学生・ボランティアが連携して8年間研究、研修をおこなってきた。今後も、蓄積した知的財産を活かし、各市の教育委員会、ボランティア団体などとの連携の下に、日本語ボランティア指導員の研修の場を設け、特に未開発の「子どものための日本語教育」研究にも力を注ぎながら、その一層の充実を図っていくことを目的とする。

2 企画委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
9月18日	聖徳大学	北村弘明 永野恵三郎 真鍋昌子 太田静江 西澤清江 藤沢明美	「JSLAC 研修講座」の企画 1. 役割分担の決定 2. 講座準備の確認事項 3. その他	・会議録作成・講座記録・講座記録整理・講座補助・レポート整理・見学担当・実習担当・講師接待・写真記録などの役割分担を決定した。 ・現時点での応募者人数・受講者の決定と名札作成・案内状配布準備・講座記録用紙・レポート用紙の確認・日程・場所・講師確認・各会議日設定などを確認した。

9月27日	聖徳大学	北村弘明 永野恵三郎 真鍋昌子 太田静江 西澤清江 藤沢明美	<ol style="list-style-type: none"> 1. 参加者の確認 2. 役割分担について 3. 検討事項について 4. その他 	<ul style="list-style-type: none"> ・応募者の中から、日本語教育歴や講座参加動機などをもとに受講者を決定した。 ・役割分担についてさらに調整した。欠席の際、役割分担に支障をきたす場合は、事前に連絡を取り合い対処する。 ・教室環境・受講生に毎回課すレポートの書式・出席確認の業務・写真撮影等についても検討した。
11月6日	聖徳大学	北村弘明 永野恵三郎 真鍋昌子 太田静江 西澤清江 藤沢明美	<ol style="list-style-type: none"> 1. カリキュラムの変更と内容確認 2. 教室見学について 3. 講座の検討事項 4. その他 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師の都合と内容により、カリキュラムの内容を一部調整した。ディスカッション、ワークショップ時、補助（ファシリテーター）をつけることとした。 ・ワークショップが形だけに終わらないよう、その方法や内容について提案した。 ・見学実習を引き受けてくれる教室との意見交換・調整について検討した。 ・レポートの整理方法について検討し、フォーマットを作成。 ・講師会議の日程、進め方について詳細を確認した。
11月27日	聖徳大学	北村弘明 永野恵三郎 真鍋昌子 太田静江 西澤清江	<ol style="list-style-type: none"> 1. 成人の日本語教育に関するディスカッションの具体的方法について 2. 成人の日本語教育に関するワークショップの具体的手順 	<ul style="list-style-type: none"> ・ディスカッション、ワークショップは、共に講師と綿密な連絡を取り合いながら、その実施方法と補助者(司会者、ファシリテーター)

		藤沢明美	と方法について 3. その他	ター)の具体的な役割を検討した。 ・司会者、ファシリテーターについては、特に事前トレーニングが重要と考え、候補者を選定する準備をした。 ・KJ法などにより、出された意見を適切に処理する方法を検討、確認した。担当講師の希望と企画委員会からの要望とを調整し、より内容の濃い授業となるよう、検討した。
12月11日	聖徳大学	北村弘明 永野恵三郎 真鍋昌子 太田静江 西澤清江 藤沢明美	1. 実習授業の評価 2. 受講者の参加状況について 3. 今後の企画運営について a. 見学実習の企画 b. レポートの体裁 4. その他	・前回におこなった「ディスカッション」「ワークショップ」(共に成人のための)の企画準備と段取りが、うまくおこなわれたかどうかについて、検討した。 ・次回には、子どものためのディスカッション、ワークショップが予定されているので、そのための企画準備の参考とした。 ・見学実習については、子どものための日本語教室を見学する企画をたて、関係者とどのように段取りを調整するか検討した。 ・見学の際に受講者に課すレポートの体裁等についても意見交換した。
1月29日	聖徳大学	北村弘明 永野恵三郎	1. 「JSLカリキュラム」をめぐっての残された研究課題につ	・これまでの研修の中で扱ったJSLカリキュラムに関

		真鍋昌子 太田静江 西澤清江 藤沢明美	いて 2. 講師から依頼のあったワークショップの手順について 3. 講座を終えるにあたっての企画準備 4. その他	して、特に教科志向型の具体的なカリキュラム作成の実例を授業の中で盛り込めないか検討した(担当講師と、講師会議において意見交換を予定)。 ・講師から依頼のあったポスターセッションの準備と手順、注意点について確認、検討した。 ・講座も終盤となり、当初の目的が達成されつつあるか、再度吟味した。また、受講者へ配付する修了証やアンケート等の作成準備も進めた。
2月9日	聖徳大学	北村弘明 永野恵三郎 真鍋昌子 太田静江 西澤清江 藤沢明美	1. 研修講座を振り返って a. アンケートから b. 企画委員から 2. 報告書作成等の事後処理について 3. 関連提携団体への事後報告について 4. その他	・全研修講座を終えて、その成果と残された問題点について、実施したアンケート調査などを分析しつつ、評価した。 ・報告書に盛り込む内容や会議録の確認などをおこなない、意見調整をおこなった。 ・報告書作成のための具体的準備項目や役割分担について検討、確認した。 ・事業成果を各ボランティア団体にどのように還元するかについても検討したが、これは今後、研究所Bプロジェクトのテーマとすることが決まった。

【写真】（企画会議のようす）



3 研修講座の内容について

(1) 研修講座名

ボランティアのための「成人および子どもの日本語教育」研修講座

(略称：JSLAC ジャスラック 研修講座)

(2) 研修の目標

- ・成人の日本語教育に関しては、いっそう質の高い教授法を備えたボランティア指導員の養成をめざす。
- ・子どもの日本語教育に関しては、各市の教育委員会による学校派遣の任に堪える人材を養成することをめざす。
- ・文部科学省から提示された「JSLカリキュラム」に関する正確な知識と技能を身につけることをめざす。
- ・各地域の状況を知ると共に、各々情報交換ができる場でもありたい。受講者にあっては受身の研修に終始せず、知識の吸収、確認に留まらず、建設的、創造的な研修となることを目指す。

(3) 受講者の総数 34人

(4) 開催時間数(回数) 75時間 (25回)

(5) 参加対象者の要件

現在、あるいは過去に、外国人児童・生徒の日本語教育に携わり、今後もその活動に従事する意欲を持っている者、および、これからその活動に新たに取り組む予定の者で、日本語教育能力検定試験合格者あるいはそれと同等の能力があると認められる者。また、毎回の自分の授業報告書を提出できる者。子どもの日本語教育ばかりでなく、成人の日本語教育の経験もあることが望ましい。30名(いずれも日本語教育歴が原則として、3年以上あることが前提)。

(6) 受講者の募集方法

- ・東葛地区における各市の国際交流協会・教育委員会・公民館および地域の日本語学習室等に募集要項を郵送。
- ・聖徳大学 HP に募集要項を掲示。（下は募集用のチラシ）

文化庁日本語教育委託事業

ボランティアのための 成人および子どもの

日本語教育研修講座

Volunteer Volunteer

略称：JSLAC（ジャスラック）研修講座

主催：聖徳大学言語文化研究所

日本語教師のレベルアップをめざして

聖徳大学言語文化研究所では、今秋、文化庁日本語教育委託事業として、ボランティア教師のための「成人および子どもの日本語教育」研修講座を開催することとしました。

その道の第一人者である講師陣と、ワークショップ、ディスカッション等の実習も充実させた実践力養成につながるプログラムを組んで、開催いたします。

講師

北村 弘明（聖徳大学教授）
 橋田 ミエ子（聖徳大学講師）
 関口 明子（国際日本語普及協会（AJALT））
 齋藤 ひろみ（東京芸芸大学准教授）
 山口 楨子（飛鳥学院日本語学校講師／聖徳大学生涯学習講座講師）

研修概要

説明会 9月27日（説明会）午後2時～

研修期間 9月29日～平成21年2月7日
 原則として月曜日と土曜日に開講
 毎回午後2時～5時
 （全25回、1コマ、2～3時間）

場所 聖徳大学（千葉県松戸市）

研修内容

【講義】「日本語教育の概要」「日本語の音声」「日本語の文法」「日本語の文字」「JSLカリキュラムの概要」「日本語教授法Ⅰ（成人の日本語教育）」「日本語教授法Ⅱ（子どもの日本語教育）」

【実習】「実習Ⅰ（成人の日本語教育）（現場見学を含む）」（文型導入の指導に重点をおく）
 「実習Ⅱ（子どもの日本語教育）（現場見学を含む）」

※全25回のうち、20回以上の出席があった方には、本研修講座の履修証をお渡しします。

※詳しい研修内容と日程は別紙「応募要項」を参照してください。

時間帯 午後2時～午後5時

募集人員 30名（先着順。書類選考をおこなう場合もあります）。

受講資格 原則として、ボランティア日本語教師としての経験がある方で、今後も成人および子どもの日本語教育に携わる意志のある方。

参加費 無料。（初回に配布物印刷費のみ実費で3,000円いただきます）

応募方法
 別紙「応募要項」の要領にて、申込用紙必要事項を記入の上、お申し込みください。

聖徳大学言語文化研究所
 〒270-8555 千葉県松戸市岩瀬550 【お問い合わせ】TEL047(365)1111 知財戦略課

(7) 研修会場

- ア 講義 聖徳大学 10号館 5F 教室
- イ 実習 聖徳大学 10号館 5F 教室
 松戸市日本語ボランティア教室（松戸市役所別館）
 NPO 外国人の子どものための勉強会（常盤平駅前教室）など

(8) 使用した教材・リソース

- 『みんなの日本語 I・II』（スリーネットワーク）
- 『小学校 JSL カリキュラム「解説」』（スリーネットワーク）
- 聖徳大学言語文化研究所プロジェクトBチーム（JSL 児童日本語教育研究会）
 作成による「JSL 児童日本語指導者からの報告書」

(9) 講座内容

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
9月27日（土） 14:00～17:00	オリエンテーションと日本語教育の現状について	聖徳大学教授 北村 弘明	30名

9月29日(月) 14:00~17:00	日本語の音声・音韻	聖徳大学教授 北村 弘明	30名
10月4日(土) 14:00~17:00	日本語の文法・文体Ⅰ(構文論)	聖徳大学教授 北村 弘明	28名
10月6日(月) 14:00~17:00	日本語の文法・文体Ⅱ(品詞論)	聖徳大学講師 樽田 ミエ子	29名
10月11日(土) 14:00~17:00	日本語の文字・表記	飛鳥学院日本語学校講師 ／聖徳大学 SOA 講師 山口 槇子	27名
10月18日(土) 14:00~17:00	日本語教授法Ⅰ(第二言語習得理論)	聖徳大学教授 北村 弘明	31名
10月20日(月) 14:00~17:00	日本語教授法Ⅰ(一般外国語教授法)	飛鳥学院日本語学校講師 ／聖徳大学 SOA 講師 山口 槇子	27名
10月27日(月) 14:00~17:00	日本語教授法Ⅰ(初級の日本語教育)	聖徳大学教授 北村 弘明	30名
11月1日(土) 14:00~17:00	日本語教授法Ⅰ(中・上級の日本語教育)	聖徳大学講師 樽田 ミエ子	29名
11月10日(月) 14:00~17:00	日本語教授法Ⅱ(子どもの日本語教育概説)	国際日本語普及協会 (AJALT)地域日本語教育 担当理事 関口 明子	29名
11月15日(土) 14:00~17:00	日本語教授法Ⅱ(学校派遣としての教育)	国際日本語普及協会 (AJALT)地域日本語教育 担当理事 関口 明子	30名
11月17日(月) 14:00~17:00	日本語教授法Ⅱ(教科志向型の実際)	国際日本語普及協会 (AJALT)地域日本語教育 担当理事 関口 明子	29名
11月22日(土) 14:00~17:00	日本語教授法Ⅱ(評価法)	飛鳥学院日本語学校講師 ／聖徳大学 SOA 講師 山口 槇子	26名

11月29日(土) 14:00~17:00	成人の日本語教育に関するディスカッション	飛鳥学院日本語学校講師 ／聖徳大学 SOA 講師 山口 槇子	29名
12月1日(月) 14:00~17:00	成人の日本語教育に関するワークショップ	飛鳥学院日本語学校講師 ／聖徳大学 SOA 講師 山口 槇子	30名
12月6日(土) 14:00~17:00	JSL カリキュラムの概要 I (トピック型概説)	聖徳大学教授 北村 弘明	30名
12月8日(月) 14:00~17:00	JSL カリキュラムの概要 II (教科志向型概説)	聖徳大学教授 北村 弘明	30名
12月13日(土) 14:00~17:00	子どもの日本語教育に関するディスカッション	東京学芸大学准教授 斉藤 ひろみ	30名
12月20日(土) 14:00~17:00	子どもの日本語教育に関するワークショップ	東京学芸大学准教授 斉藤 ひろみ	28名
1月19日(月) 14:00~17:00	教室活動の実際 (初級・模擬形式)	聖徳大学教授 北村 弘明	27名
2月2日(月) 14:00~17:00	JSL カリキュラムに関する現状と課題	早稲田大学准教授 池上 摩希子	24名
2月7日(土) 14:00~17:00	実習を振り返って(総括 討議)	聖徳大学教授 北村 弘明	31名
10月25日(土) 14:00~17:00	松戸市日本語ボランティア 教室 外国人スピーチ大会見学	聖徳大学講師 樽田 ミエ子	27名
11月17日~ 1月26日 10:00~12:00	松戸市日本語ボランティア 教室 教室見学	松戸市日本語ボランティ ア教室 関 美智子(コーディネーター)	33名
1月17日~ 1月31日 13:00~17:00	NPO 外国人の子どものた めの勉強会 教室見学	外国人の子どものための 勉強会 西澤 清江(コーディネーター)	31名

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

a. アンケートの体裁

聖徳大学言語文化研究所 JSLAC 研修講座

全講座を終わってのアンケート

■所属団体の所在(松戸市・柏市・我孫子市・船橋市・鎌ヶ谷市・流山市・野田市・千葉市・その他)

各項目のイ～ホに○をつけてください。また理由などもお書きください。

1. 全体の印象

- イ 大変満足
- ロ 満足
- ハ 普通
- ニ やや不満
- ホ 不満(理由:)

2. 講義内容

- イ 大変わかりやすかった
- ロ わかりやすかった
- ハ ふつう
- ニ 少しわかりにくかった
- ホ わかりにくかった(理由:)

3. 講座科目

- イ どの科目も興味を持てた
- ロ だいたい科目に興味を持てた
- ハ 半分くらいの科目に興味を持てた
- ニ 少しだけ興味を持てた
- ホ ほとんど興味を持てなかった(理由:)

4. 教室の状態・設備

- イ 大変満足
- ロ 満足
- ハ 普通
- ニ やや不満
- ホ 不満(理由:)

5. 授業の時間帯

- イ 大変満足
- ロ 満足
- ハ 普通
- ニ やや不満
- ホ 不満 (理由: _____)

6. ボランティア活動への有益性

- イ 今後、大変役にたつと思う
- ロ 今後、役にたつと思う
- ハ 普通
- ニ 今後、あまり役にたつと思わない
- ホ 今後、ほとんど役にたつと思わない (理由: _____)

7. スピーチ大会の見学実習

- イ 大変満足
- ロ 満足
- ハ 普通
- ニ やや不満
- ホ 不満 (理由: _____)

8. 成人の日本語教室見学実習

- イ 大変満足
- ロ 満足
- ハ 普通
- ニ やや不満
- ホ 不満 (理由: _____)

9. 子どもの日本語教室見学実習

- イ 大変満足
- ロ 満足
- ハ 普通
- ニ やや不満
- ホ 不満 (理由: _____)

10. この講座に関する感想をどんなことでもお書き下さい

11. この講座を受講した成果をどんなことに役立てたいと思いますか

12. 今後、開講を希望する講座がありましたらお書きください

13. 「聖徳大学言語文化研究所」に対するご要望などがありましたらお書き下さい。

b. アンケートの結果・分析

J S L A C 研修講座 全講座を終わってのアンケート結果

09.2.12 実施

大変満足	満足	普通	やや不満	不満
------	----	----	------	----

1. 全体の印象

62%	32%	6%	0%	0%
-----	-----	----	----	----

2. 講義内容

大変わかりやすかった	わかりやすかった	ふつう	少しわかりにくかった	わかりにくかった
29%	47%	12%	12%	0%

3. 講座科目

どの科目も興味を持てた	だいたい科目に興味を持てた	半分くらいの科目に興味を持てた	少しだけ興味を持てた	ほとんど興味を持てなかった
38%	56%	6%	0%	0%

4. 教室の状態・設備

大変満足	満足	普通	やや不満	不満
47%	41%	12%	0%	0%

5. 授業の時間帯

大変満足	満足	普通	やや不満	不満
35%	38%	26%	0%	0%

6. ボランティア活動への有益性

今後大変役にたつと思う	今後、役にたつと思う	普通	今後、あまり役にたつとは思わない	今後ほとんど役にたつとは思わない
50%	50%	0%	0%	0%

7. スピーチ大会の見学実習

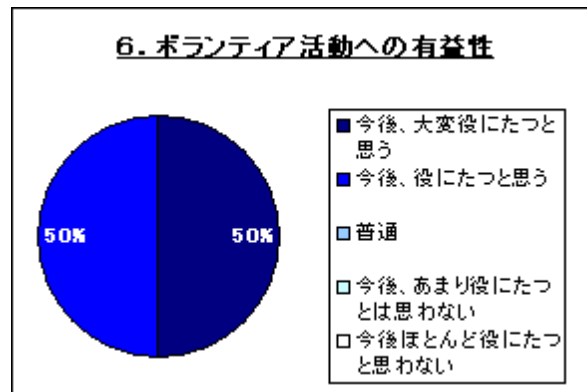
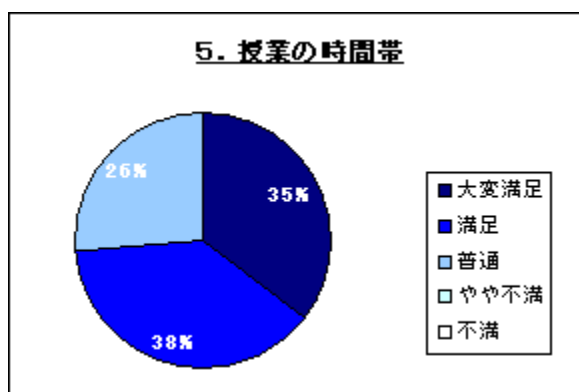
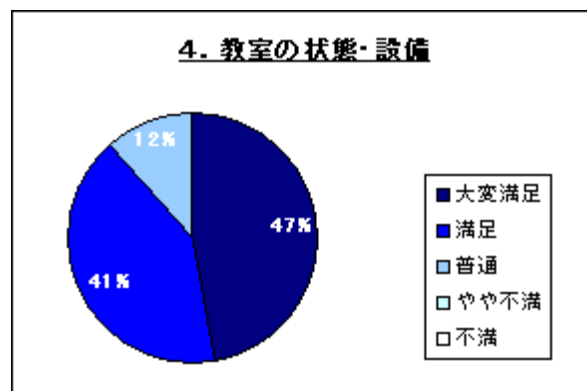
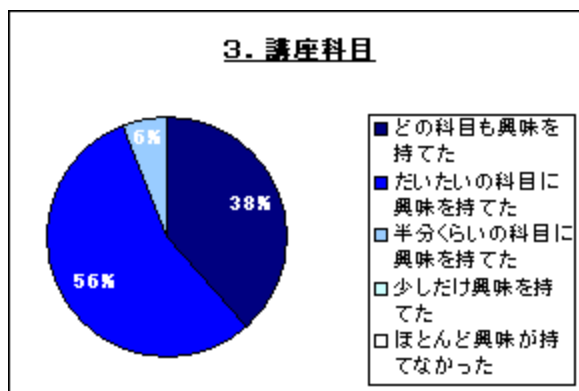
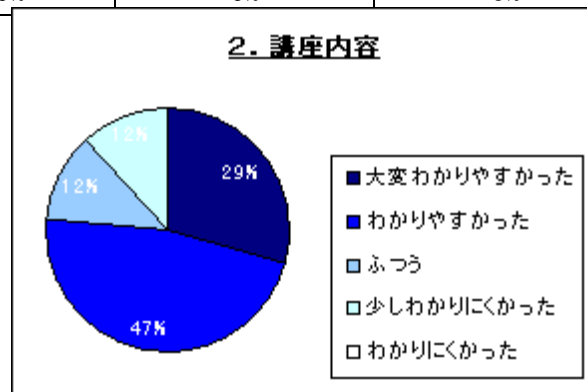
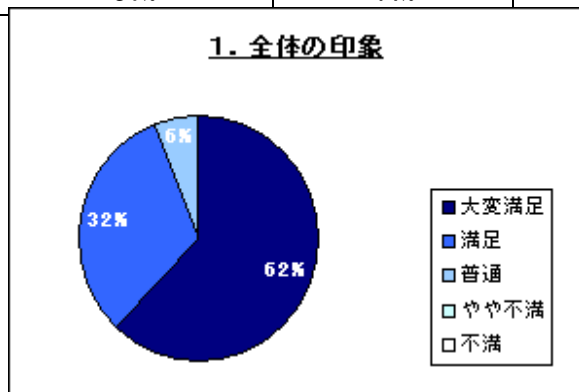
大変満足	満足	普通	やや不満	不満
33%	53%	13%	0%	0%

8. 成人の日本語教室見学実習

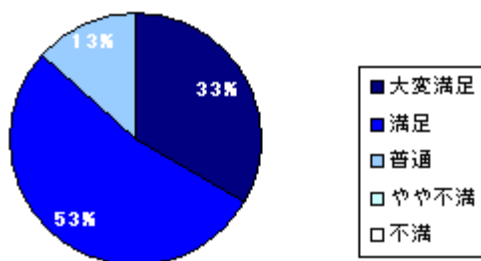
大変満足	満足	普通	やや不満	不満
40%	37%	37%	0%	0%

9. 子どもの日本語教室見学実習

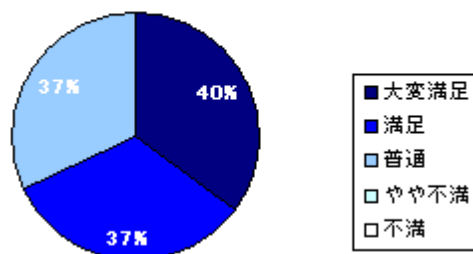
大変満足	満足	普通	やや不満	不満
31%	44%	19%	6%	0%



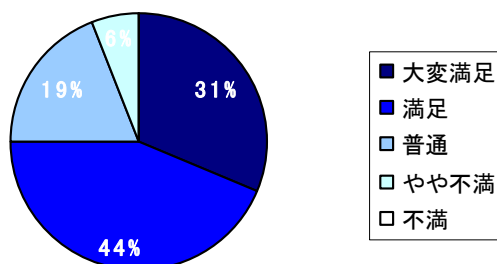
7. スピーチ大会の見学実習



8. 成人の日本語教室見学実習



9. 子どもの日本語教室見学実習



アンケート項目 10～13

	市	この講座に関する感想をどんなことでもお書きください	この講座を受講した成果をどんなことに役立てたいと思いますか	今後、開講を希望する講座がありましたらお書きください	「聖徳大学言語文化研究所」に対するご要望などありましたらお書きください
1	松戸	・日本語と日本語教育の奥の深さに驚いた。	・実際の授業に応用したい。		
2	鎌ヶ谷	・大人の学習についてもそうだが、特に子どもの学習についての話が切望していたものでもあり役に立った。	・教室のボランティア仲間にも得られた情報を提供し意識を共有化して教室全体のレベルアップ化に役立てる。	・子どもに対する日本語教育の研修を是非お願いしたい。	
3	船橋	・大変収穫の多い講座だった。このようなすばらしい機会が実現したことに驚きさえ感じている。北村先生をはじめ経験ある先生方の下で私たちの活動で実際に役立つ	・成人教室のみ教えているが、今回は子どもの教育で学ぶことが多く、また初めて知ることばかりだった。機会があれば子ども教育にも参加できる気持ちのきっかけができた気がする。	・この講座と今回受講できなかった方たちにも勧めたいと思う。 ・一回だけでなくまた機会を作っていただきたい。	

		<p>授業内容だった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第一線で活動中のボランティアの皆様と真剣に考えたワークショップは「考え方」を鍛えられたと思う。 			
4	柏	<ul style="list-style-type: none"> ・講座の中に実習やワークショップなどがあったのがよかった。やはり体験してよくわかり、視野が広まり深まるが多かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今までマンツーマンで教えることが多く、その授業の中でも学んだことをたくさん活かせるか、やってみたいと思う。グループ指導のおもしろさも教えてくださった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・公民館などではサバイバルの日本語指導をというお話もあったが、どういう場面を取り上げたらよいかなどを勉強したい。 	
5	無記	<ul style="list-style-type: none"> ・まず、熱心に教えご指導くださった諸先生方に感謝したい。 ・日本語教育の知識についてはあまりに忘れてしまった事柄が多く、反省させられた。 ・子どもに対する日本語教育に関しては、初めて知ることばかりで新鮮でもしよかった。 ・他市の人々と知り合いになれば、情報交換ができたのは収穫であった。 ・スピーチ大会、日本語教室（大人・子ども）の見学をさせていただきありがとうございました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家族の事情が許せば、子どもを教えてみたいと思っているので、実現すれば役立たせたい。 毎週の日本語教室の中で役立たせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・板書の書き方。使い方の説明 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語ボランティアにとって役立ちそうな情報をお知らせいただければありがたい。
6	無記	<ul style="list-style-type: none"> ・出席させていただきありがとうございました。私は月曜日は中学校の日本語ボランティアがあり土曜日しか出席できずとても残念だった。 ・毎回楽しい学習をさせていただきながら、県内の多くのボランティアの方々とも交流ができとても有意義だった。 ・お陰様で知識を得ると同時にボランティアの知人が増え、今後の活動に大きな力になりそうだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の授業に役立てたいと思うし、これから出会う外国人との交流にも役立てたいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・北村先生の日本語・国語の基礎的な講座を拝聴したいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の講座のブラッシュアップ編、続編をお願いしたい。このような機会を設けてくださり感謝、感謝。
7	無記名		<ul style="list-style-type: none"> ・これからの授業に大いに参考にしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・またこのような講座をお願いしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな講座楽しみにしている。

8	船橋	<ul style="list-style-type: none"> ・25回講座と考えたときとても大変だと思ったが、今終わるにあたりもっと続いて欲しいなあと思う気持ちだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・成人の日本語教室、小学校での児童への指導に役立てたいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・このような講座をまた受けることができれば幸いです。よろしくお願いいたします。 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回いろいろご配慮いただきありがとうございます。
9	無記	<ul style="list-style-type: none"> ・講師がバラエティに富んで楽しくできた。タスクを使った講習は参考になった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・タスクの使い方 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回は子どもの日本語教育の講義もあったが、次回は成人の日本語教育を重点的にやってほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・是非またこのような講座を計画してください。
10	無記	<ul style="list-style-type: none"> ・大人子どもの講座で両方聞くことができよかった。多くの方と話せたことも情報交換になった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特に子どもを教えるとき参考にしたいと思う。 ・コミュニケーション・アプローチといっても『みんなの日本語』でどうできるか考えたいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ナチュラル・アプローチの教授法 ・外国人の誤用の指摘の仕方と直し方。(教え方) ・板書の効果的な使い方、提示の仕方。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回のような講座を定期的にやってください。(もう少し短期で週一回くらいで) 成果物になるような講座やスキルアップの講座など。
11	無記	<ul style="list-style-type: none"> ・成人および大人を対象とした日本語教育(教授法)ということだったが、子どもを対象とした内容が多かったような気がする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語教室(国際交流協会)の場で役立てたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語の話芸 	
12	流山	<ul style="list-style-type: none"> ・手探り状態で実践のみに追われ基本的な勉強は置き去りにしてきたが、今回まとまった講座を受けいろいろと気づかされたこともあり本当にありがたかった。 ・毎回のレポートは授業直後で頭が混乱状態中で書かなくてはいけなかったのでいささか苦痛であたったし、日ごろ集中力が低下していることを痛感した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの単発的講座の中では子供の指導に関しては実情が異なるので聞きっぱなしにしているところが多かったのですが今回はワークショップをはじめとして具体的だったので今後の子供の指導に活かしていけそう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童、生徒の日本語教育に関してもう少し知りたい。 	
13	野田	<ul style="list-style-type: none"> ・初めの頃は難しくどうなるかと思ったが、だんだん回を重ねていくうちに楽しくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後子どもの教室支援をするとき講座で勉強したことを実践したいと思う。大人の日本語教室でも子どものための日本語で勉強したことが実践できると思った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・この講座を受けた人たちと情報交換、レベルアップなどの会を1年に数回開いて欲しい。 	
14	松戸	<ul style="list-style-type: none"> ・たくさんのすばらしい講義をいただいたが、特に「子どもの日本語教育」が大変勉強になった。子どもの環境、背景、日本語に関する問題など事例を伺い重い気持ちになったが、何をやれば 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域のボランティア活動や就学生の授業に役立てていきたいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人への「漢字」の教え方 ・「日本事情」の教え方 ・JSL カリキュラムのワークショップ 	

		力がつくかがわかる先生を目指したいと思う。			
15	我孫子	<ul style="list-style-type: none"> ・バラエティに富んだ授業内容で大変勉強になった。 ワークショップは初めての体験だったので新鮮だった。 ・ワークショップを通じて他の方の考え方や方法をきくことができ参考になった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子供の取り出し授業に役立てたい ・大人の授業にはFunctionを忘れないようにしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科指向型の日本語の教え方 	<ul style="list-style-type: none"> ・トイレの数は確かに少なかったが、そのほかはきれいな教室で快適な環境で学ぶことができました。ありがとうございました。
16	松戸	何とんでも北村先生のお話がたくさん聞けたことがよかった。興味深い話が多く日々の指導の参考にしたい。	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語学校、日本語教室、学校全てにおいて役立てられそうだ。今回の講座で発見や確認をすることができ、自分の知識の階段を一段上がれたような気がする。(まだまだ先には長い階段がある……) 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語教師検定試験の講座希望 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ことば」について知りたいことが山のようにある。辞書で調べてもよくわからないことなど教えていただける機会があればいい。そんな勝手な講座ができれば楽しいだろうと思う。
17	無記	<ul style="list-style-type: none"> ・3時間だが、あっという間で時間の長さを感じさせない楽しい講義だった。 ・一つ学習者からの希望を取って多かった項目の講義を受けられたらよかったかな、などと思った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の授業はもちろん、ボランティア同士で共有し合い、勉強会などで研究していきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・北村先生の授業を見学したい。『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』を使用しての授業を希望。 	
18	船橋	<ul style="list-style-type: none"> ・本講座の募集要項に日本語教師としての経験が謳われていたので参加できないと思った。当初はどうなるかと心配したが無事修了することができた。参加させていただいたことに感謝する。 ・日本語教育に必要な広くて深いものであったことに圧倒させられた。またディスカッションやワークショップでは参加されてい 	<ul style="list-style-type: none"> ・受講しながら実際の活動ではどのように活かしていこうか試行錯誤しているところだが、教室運営も絡んでくるので当面は2時間の授業のうち、半分は学んだことを実践していければと思っている。 		


		るボランティアの方々のキャリアの豊富さに驚かされた。大いに参考になった。			
19	船橋	・すぐに役立つ内容もたくさんあり大変有意義だった。また、理論的なことも知らないことが多かったのもっと勉強の必要なことに気づかせていただいた。	・実際の授業の中に応用したい。 ・日本語能力検定試験に挑戦してみたい。	・子供に教えるときに役立つ教具を作る。 授業案作り etc. …	
20	松戸	・最高の教授陣、最高の環境。二度と体験できない数ヶ月であった。	・日ごろの日本語支援活動をするときの精神的なささえになる。	教科学習(小・中学生)と日本語支援との関連について。	講座には積極的に参加したい 対外的なPRを希望する。
21	流山	・講座内容も参加している受講者のレベルも高くその中に混じって勉強するのは大変なプレッシャーがあった。 ・最後まで一回も休まずに受講できて本当にありがたく満足感でいっぱい。(前半の講義が特に難しくもっと実習の時間が多かったらうれしいと思った)	・先生がいつもおっしゃる「外国人が役立つ日本語を考える」ということを頭においてやっていきたいと思う。		
22	無記	・有意義な時間を過ごせた。ありがとうございました。	・自分自身の自信(ささえ)になった。	・指導時の注意点やアイデア	
23	無記	・授業が「混沌」とした感じで時間に流されていくのに耐えていけない!と思い始めていた。仲間を頼る前に自分の内面をグレードアップする。(素直に頼れる雰囲気のないのが残念)	・今活動中の教室で学習者との交流、活動に。	・またこのような講座を開講していただきたい。	
24	無記	・大変勉強になった。マンネリ化していた内容を再度見直し勉強することができ感謝している。	・現在支援中の児童を含めた成人教室でも研修を受けたことを忘れずに支援できれどと思っている。		・昨年より約半年間、本当にお世話になりました。
25	船橋		・実践できるものがたくさんあった。		
26	我孫子	・初めの頃は大変難しく最後まで参加できるだろうと不安だったか、馴染ん	・外国人(大人・子ども)への日本語指導に役立てたい。	・継続的に学び着実に身につけたい。	

		だテーマなども入ったりして徐々に講座に慣れ 手ごたえを感じるようになった。どれほどのことが身についたかわからないが今終わってしまうのが残念な気がする。			
27	無記	・テスト形式なものには大変驚かされたが、刺激があり励みになった。	・子ども対象の講座は 実際的なので大変役に立った。	・次に続く方々にも受けていただけるように講座が続くとうれしい。	
28	無記	・いろいろな地区からの参加者に会えない思いがけない出会いや、広い知識・意見を満喫し、この講座に出席したことを心より喜んでいる。 ・自分の知識の少なさを反省するよい機会だった。	・本当に私を必要とする場所を見つけ出せ、一人でも困っている外国人の方々に役立ちたいと考えている。	・またこのような講座を希望する。	・山口所長、お手伝いくださった皆様、事務の方々、気持ちよく授業を受けさせてくださいありがとうございました。
29	無記	・長期間に亘っての講座だったため、継続して日本語教育について考えるモチベーションになった。 ・ボランティアの皆さんの生き生きとした様子が印象的で生涯学習としての日本語教育学について考えるきっかけとなった。			
30	流山	・今まで経験したことがなかったワークショップ、ポスターセッション、グループワークなど実践的でとても参考になった。	・子供のための日本語教育の中で紹介された教具・教材を自分の授業の中で使ってみたい。	・今回と同じ講師の方々で異なる内容での講座があったらいい。	
31	松戸	・週2回はきつかったが、中身の濃い講座でとても楽しく受講できた。	・子どもの学習で既に利用させていただいている。ヒントをたくさんいただいたのでこれから活用させていただく。		
32	無記	・素晴らしい経験のある先生方から、素晴らしい知識と教えることの情熱をいただき感謝している。	・今教えているクラスの実践で少しでも楽しい授業ができるようにしたいと思う。		
33	柏	・非常に広い範囲にわたって教えていただき、今までほと	・現在やっているボランティア活動に大いに役立たいと思う。また現在大人	・日本語教育に関する講座を再度開いていただきたい。また「日本語」	・今後もこのような講座を開いて欲しい。今回は参加させていただき本

		んど触れた事のな いところまで勉強 することができて 満足している。逆に 「広く浅く」になっ て少し物足りない 感じもあった。これ を機会に今後もっ と自分で勉強せね ばならぬという気 持ちになった。	を対象としたボランティ アしかやっていないが、今 後機会があったら子ども の日本語指導もしてみた いと思っている。	の講座も希望。	当にありがとうございます ました。
34	松戸	・志の高い聡明な 方々と一緒に学 習できたのは光栄 だった。講座の内容 も充実していた。	・まずは 現在の活動（学 校派遣）を通じて何も知ら ない学校側に少しずつ伝 えていきたいと思う。	・日本文化と多文化の共 生について。	・地域他への貢献に感謝 いたします。

c. 毎回の授業終了時に課したレポート

レポート体裁

 <p>SEITOKU</p>	<p>平成 20 年度 文化庁日本語教育委託事業</p> <p>JSLAC ジャスラック 研修講座（聖徳大学言語文化研 究所主催）</p> <p>レポート用紙</p>
<p>平成____年____月____日</p>	
<p>氏名_____</p>	
<p>授業内容_____ 担当講師名_____ 先生</p>	
<p>【授業中、特に印象に残った点】</p> <p>・</p> <p>・</p> <p>・</p> <p>・</p>	

【質問事項】

- ・
- ・
- ・

【感想】 (200 字程度)

d. レポートの分析

・「特に印象に残った点」の項目に記されたもの(各授業別)

● 「日本語の音声」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

- ・日本語の音韻イメージで聞いているから意味がわかる。(日本人同士)
- ・聞き分けられない=言い分けられない
- ・音韻について、今まで意識していなかった点が多くあり、大変勉強になった。
- ・アイウエオを正確に美しく発音できる日本人は意外と少ないこと。
- ・ひらがなは発音記号ではない。
- ・何気なく使っている/N/、/Q/、/R/が特殊音素と名づけられいろいろ研究されていること。
- ・ボランティア日本語教師も知っておくべき日本語の基礎だと感じた。
- ・拍意識は日本人の感覚と外国人のものとは違う。
- ・特殊音素が外国人に受け入れられ難い理由がよくわかった。
- ・ふだん意識しないで使っていた音声レベルの発音の違い。
- ・音韻のときの撥音/N/の実践的な先生の教え方が楽しかった。
- ・(外国人に対する) 長音の教え方は勉強になった。おもしろかった。

- ・先生のユニークでユーモアのある進め方で退屈しない授業だった。
- ・高低の音が出る道具を使ってのアクセント練習はわかりやすくていいと思う。
- ・音韻の理解が深まったので大変助かった。
- ・「拍数から特殊音素を省けば音節数が出る」ということ。今までよく理解できなかったの
で、今回納得することができた。
- ・音声は語学教育の基礎 → 自分はこれまで少しないがしろにしてきたかも。
- ・音韻体系の形成は、第二外国語習得にとって重要である。
- ・音声・音韻は、その理屈を聴いてあらためて自覚する面もあり、大変役に立つ。
- ・「ん」に4通りの発音記号があること。
- ・「ん」「っ」「ー」の特殊音素は音節に数えない傾向にあること。
- ・音声と音韻の違いなど、あらためて勉強になった。
- ・日本の単語では4拍語が一番多い理由がよくわかった。
- ・音声と音韻の2つがあるということ。音声について聞いたことがあった。
- ・一つのことを学習した後は問題の形でやってみること。私自身の学習にもボランティア
の授業にも有効だと思うので、やってみたい。
- ・特殊音素の部分が自分の頭の中できちんと認識されていなかった。今後自分が指導する
ときに役に立てられそうで大変参考になった。
- ・音韻体系は生まれて早くに作られるので、後から知識として作られると不正確になりや
すい。
- ・音韻イメージがないとことばは聞きとれない。
- ・母音とは顎の開け具合、唇の形、舌の位置で調整する有声音であること。
- ・音声の講義を初めて受けたときに音韻体系を知ることの大切さを認識した。今回もそれ
を再認識できた気がした。
- ・母音の発音を利用する意味でも日本語の音韻体系と、相手の母語の音韻体系(音声)を知る
ことは必要だと思う。
- ・無声子音に挟まれた長母音は無声化する。
- ・缶を使って音の高低を分けられるのはとてもいい方法だと思った。
- ・全ての点について先生の説明がわかりやすかった。(忘れないように努力したい)
- ・日本語と外国語の発音の違いが少しだけわかってよかった。
- ・母音と子音との正確な定義
- ・特殊音素。特に長音の習得が外国人にとって困難なこと。
- ・「拍(モーラ)」の正しい概念について。
- ・アクセントの聴き取りはずっと苦手だった。が、先生が缶をたたいて音を出されたとき、
こうすればはっきりと分かるものだと思い安心した。是非やってみたい。
- ・平板式と尾高式は「が」をつけて判別する。
- ・高低アクセントの練習で、缶をたたくアイデアは使ってみたい。

- ・長音と撥音の表記が一致しない場合の教え方が理解できた。
- ・音声用語の定義を再確認できた。
- ・音声音韻の区別、特殊音素とプロソディー……知らないことがたくさんあった。
- ・アクセントの種類（記号「┌」では知っていたがことばとしてはじめて知った。
- ・長音など特殊音素は音節には数えないこと。
- ・音韻とひらがな表記との関係
- ・ひらがな表記≠発音記号
- ・音声学はいつも大切だと思いながら生半可な知識で過ごしていたが、聞き始めた途端にわかりやすく、今日一回だけでも来てよかったと思った。
- ・講義がとてもわかりやすく、これから頑張って勉強していける気がした。でも、最後の印象はやはり難しい。（講義がではなく音声学が）
- ・「勉強した後、チェックしないと本当の実力にならない、活かせない。」このことばがとても印象的だった。今までまさにそれだった。
- ・教える側の言葉に対する自覚が大切である。
- ・発音記号の括弧は[]で、〔 〕は不正確であること。
- ・音韻の形成は子供のときに培われる。成人になってからでは困難。母語で似た音韻を利用するとよい。
- ・アクセントの起伏式の種類で、「が」をつける判別法が興味深かった。
- ・音声・音韻は何度も聞いているので確認できた。模擬テストになるとまだ難しい。
- ・平板式・尾高型の違いがよくわかった。
- ・缶をたたいてのアクセント高低はわかりやすかった。
- ・いつものことだが、実際の音を出してくださったのがとてもよかった。
- ・アクセントの缶利用法はいい。私はちょっと弱いので。
- ・日本語と英語の母音は全く異なるものであること。（少し共通しているという意識だった）
- ・子音と母音の違いが明確になった。
- ・音声[]、音韻が/ /、初めてわかった。
- ・以前に、拍を使って教えなくてよいと言われたことがあった。今日の講義で、長音の使い方の問題などでは重要だと感じた。
- ・母音と子音の定義が明確になった。
- ・音声と音韻の違い。特に鼻濁音や英語圏と日本語の違いをあらためて認識した。
- ・音韻について知らなかったことが少しだが確実に理解できたように思えた。この知識をいつまで保てるか少々心配だが、とにかく楽しく講義が受けられた。

●「日本語の文法・文体Ⅰ（構文論）」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

- ・「ワードサラダ」という用語は初めて聞いた。
- ・ことばの正誤については、意識的にわかっていないことがある。「いい」「悪い」はわか

っていても説明ができない。

- ・品詞論の成り立ちについて。
- ・ことばの難しさ。
- ・大きな文学作品のある言語は消滅しない。日本には「源氏物語」がある。
- ・単語の意味には幅がある。単語一つで意味を決定できない。また「構文上の同義語」という概念。
- ・「日本語には主語がない」という言い方には気を付けるべき。英語などの主語と日本語の主語は違う。
- ・ボランティアによる日本語授業とプロの日本語教師による授業に優劣の差があってはならない。本来同じレベルであるべきである。我々は絶えずブラッシュアップしていく必要がある。
- ・いろいろな連体修飾の形について(同一名詞連体修飾など)。
- ・構文論上、「言える、言えない」はわかるが、それがなぜなのか説明できないことがまだたくさんある。
- ・授業前の先生の余談？がとてもいい。
- ・チョムスキーの変形生成文法の中でワードサラダの話が印象に残った。
- ・連体修飾の仕方の項目で、「という」が入らない名詞、また入らないとおかしくなる名詞を教わってとても勉強になった。
- ・制限用法と非制限用法→英語文法でやっていたが、日本語で教わり、なんだか簡単すぎて目から鱗だった。
- ・「内と外の関係」のつつこんだ説明。わかりやすかった。
- ・3時間では物足りない。
- ・構文はそれを構成する単語の分析も大事。
- ・アメリカ構造主義言語学（意味を対象にしないという方法に驚き）
- ・連体修飾の仕方だけでも種類があること。
- ・未解決問題（3人の学生）に関する話。
 - ◎「3人の学生が立っている」→「学生が3人立っている」
 - ×「3人の学生に説明した」→「学生が3人説明した」
- ・単語には意味があり、構文だけでは教えられないことがよくわかった。受講者に間違えずに正確に伝えることの難しさがわかった。
- ・制限用法と非制限用法について。自分で正確に理解していないと教えられないことがよくわかった。
- ・問題を解きながら構文の説明をしてくれたことはわかりやすかった。
- ・連体修飾句の性格。このように日本語文を分類することは大変おもしろい。
- ・文法の知識は奥が深い。
- ・大きな文学作品があるとその言語は消えない。(アメリカインディアン・アイヌ民族など)

- ・ワードサラダとスパムメールの例がおもしろかった。単語はでたらめだが構文は正しいという実例。
- ・構文上の「内外(ウチソト)」は敬語論での「内外」とは違う。
- ・連体修飾句に関する新しい知識を得られてよかった。
- ・構文で文章を考えると意味が少しずつわかってきた。
- ・構造主義についての説明（先生の出された例がとてもしゃわかりやすかった。）
- ・説明の中の例文の使い方が非常にわかりやすかった。
- ・「連体修飾句に関する確認問題」の中に出てくる用語が理解しにくかった。
- ・寺村秀夫先生、奥津敬一郎先生の「内・外の関係」などは習ったことがあるのに、何も覚えていないことに気付いた。
- ・相対名詞連体修飾・同格名詞連体修飾などという用語が出てくると頭が混乱してわからなくなった。家に帰ってゆっくり考え直したい。
- ・日本語の構文（構造）を客観的に分析し説明する力が大切である。
- ・日本語にはまだ研究、解明する分野がたくさんある。
- ・構文論は、予想よりおもしろかった。
- ・構文論の研究で（種々の変遷を経て）、構造主義では意味を除き、また意味の扱いが変わってきた推移がわかった。
- ・感覚的にわかっているだけでは説明できない。それを構文論でしっかり裏付けていく必要性を感じた。
- ・制限用法・非制限用法はもう少し例文で確認したい。
- 外の関係の相対名詞連体修飾と同格名詞連体修飾がはっきりわかったこと
- ・連体修飾句と構文論全般
- ・全体的に難しい。
- ・連体修飾に関する確認説明で、名称などが難しかった。

●「日本語の文法・文体Ⅱ(品詞論)」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

- ・文脈指示の用法
- ・文章を品詞に分けたこと。
- ・「ています」を動詞との接続関係で、4つに分類できること。
- ・外来語に「な」をつけられれば、それは全て「ナ形容詞」と見なせる。
- ・日本人は挨拶するとき、不平不満をよく言う。これは嫌なことを相手と共有しようとしていることで、学習者には国籍によって奇異に感じられるので注意を要するという事。
- ・「ています」の使い方
- ・文脈指示の「こ・そ・あ」
- ・過去2回の授業に比べて馴染みやすかった。
- ・教師と生徒のやり取りがあり、よかった。

- ・ 補充のプリントや例題がたくさんありとてもわかりやすいのでいいと思う。ただし、枚数が多い場合は番号をつけると授業がもっとスムーズに進められると思った。
- ・ ネイティブとノンネイティブの感覚の違いはおもしろかった。
- ・ 文脈指示を表わす指示詞の使い方
- ・ 実践的な話で受講生の質問が活発だったのが印象的だった。
- ・ 講師の考え方に疑問を呈する受講生がいたこと。
- ・ もう少し時間をとってゆっくり教えてもらえたらよかったと思う。講師ももっと我々に話して下さることがたくさんあるのではないかな。
- ・ すごく難しく思いながら日本語のおもしろさを最近感じている。
- ・ 自動詞、他動詞と区別しづらい動詞をもう一度押さえたかった。
- ・ ナ形容詞はいろいろな考え方や分け方がある。
- ・ 文脈指示の指示用語が難しかった。
- ・ 「あの」「この」「その」の明快な分類は難しい。
- ・ 文脈指示の用法……プリント問題の解答に対していろいろな意見が出たのが興味深かった。
- ・ 国語教育文法と日本語教育文法との関係
- ・ 「ています」の意味を考えたときに気がついたのだが、実際には生活に必要なだけと考えられるので動詞「ます形」の過去形を早い段階で教えているが、それでいいのかな。
- ・ 文脈指示を表わす「こ・そ・あ・ど」は難しいと思った。
- ・ 文脈指示を表わす「こ・そ・あ」の練習問題の意見がわかれた。
- ・ テ形の補助動詞の使い方（使い方のよって意味が違うのがよく理解できた）
- ・ 指示詞の用法、特に「あの」「その」の違いを今迄あまり正確に区別しないことがあったが、整理することができた。（他にも同じような人がいることがわかって安心した）
- ・ 「ています」の表わす意味の多様さ。
- ・ 「0音便」
- ・ 擬態語の用法・ルールについて。
- ・ 文脈指示の問題は受験勉強の作文指導で痛切に感じていた問題だったので大変よかったと思った。
- ・ 「～す」がつく動詞は他動詞であることが多い。
- ・ it・this・thatの使い方の違い。
- ・ ことばは国によって使い方が違うので難しいと再確認した。
- ・ 品詞の分類法を確認できた。
- ・ テ形で使う範囲の広さをいまさらながら思った。
- ・ ふだん、初級の授業では現場指示の「こそあ」しか扱わないので、文脈指示の「こそあ」について、今日は新しい勉強だった。
- ・ 英語圏の人の言い方と違う例を実際に比べてもらって、さらにその難しさを感じた。

・日本人は動詞のグループ分けの方法として、「ナイ形」時の母音から判断するが、外国人にはそれがわからないので、分類することができない。一語ずつ憶えてもらうしかないと思う。

・先生の提示する文章は平易でわかりやすく、日本語教室で即使用できると思う。

・品詞分け：動詞（フォーム、グループ分け、自他動詞）形容詞、名詞など。

・イ形容詞とナ形容詞の関係：大きい—おおきな、小さい—小さな（大きな／小さな は連体詞）

・連体詞：範囲をどこまでにするか諸説あり、定まっていない。

・「こ・そ・あ」の判断にこんなに迷うとは思わなかった。

・ナ形容詞の連体用法としての扱い。

・「～ています」の状態と動作の継続

・補助動詞「～ています」について

・文脈指示・現場指示の相違は知っていたが、文脈指示は初めてだったのでとてもおもしろかった。

● 「日本語の文字・表記」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

・「音」読みには種類があったこと。

・ひらがな「じ」と「ぢ」、「づ」と「ず」（四つ仮名）

・カタカナの字源

・漢字の慣用音について。

・『みんなの日本語』を他のテキストと比較してくださったので特徴がわかった。

・漢字はとても苦手だが先生の説明はとてもためになった。

・ローマ字の区別の説明が多少わかりにくかった。

・小学校ではヘボン式ではなく訓令式を教えている。

・凹 凸 卍の筆順はおもしろい問題。

・生徒が質問してくるであろう事項を、前もってきちんと調べていた先生を見て、下順準備の必要性を教えていただいた気がした。

・筆順の原則は、漢字を教える上で役立たせたいと思う。

・漢字の構造の分類がおもしろい。

・漢字が新聞に70%も使われているとは驚きだ。

・外国人にとって日本の新聞の解読は大変だと思った。

・漢字については興味があったので印象的だった。

・「転注」文字はわからなかった。

・「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」の使い分けは難しい。

・「じ」と「ぢ」「ず」と「づ」の読み方の法則（考え方）がいつも不明。考えるポイントを知りたかった。理解できなかった。

- ・当用漢字などの字数などは常識なのに、正確な数が思い出せなかった。
- ・甲骨文字のレプリカを見ることができて大変参考になった。(亀のお腹側に書かれたとは知らなかったのだ)
- ・「凸」と「凹」の筆順が参考になったが、「卍」は難しくて覚えにくい。
- ・ローマ字表記については教える必要があるか。(英語圏の人で、ひらがなを習得する前にローマ字でノートをとっている場合、間違いがあっても本人がわかればよいと思い、そこまで注意していないが)
- ・文字の歴史的な面は調べたらおもしろいと思う。
- ・筆順の十原則
- ・かなづかいの「じ」と「ぢ」のどちらを使ってもよいということば(世界中)があることなど初めて知ることが多かった。
- ・漢字の筆順の画数、漢字の構造の話が面白かった。
- ・拗音の書き方——横書きの場合の字の配置
- ・四つ仮名の読みについて。「いなづま」などはどうして「づま」が「ずま」と書かれなければならないのか。許容範囲として「いなづま」とするのは本末転倒のような気がした。
- ・日本語の文字表記のあいまいさ、難しさ。
- ・文字表記の基本的な知識がわかった。(他の受講生の方々が知識を多くお持ちなのに…)
- ・漢字の説明、特に起源と構造
- ・文字を持たなかった日本人が中国の文字を利用して仮名文字を発明するに至った、という授業を受けて、初めてすごいことだと思った。
- ・「六書」の説明がとても面白かった。
- ・漢字の数 47000 余は康熙字典の根拠も説明された方がよかったと思う。
- ・呉音・漢音・唐音の区別は難しい。分類する意味が(学問的以外には)あまりないのではないか。
- ・ひらがな・カタカナのなりたち
- ・当用漢字・常用漢字・漢字の書き順・漢字の構造
- ・いきなりの小テストに驚いた。(すっかり忘れていたものが多くて焦った)
- ・漢字の歴史について。
- 「じ」と「ぢ」、「づ」と「ず」どちらかわからない時は本則を教えたほうがよい。
- ・字体には許容があることもわかった。
- ・漢字の数の多さ。

●「日本語教授法Ⅰ(第二言語習得理論)」の授業で特に印象に残った点としてあげられたもの

- ・「ことばは文化の底辺を支えている」
- ・使いこなせる日本語を教えるべき。「お勉強」ではない「日本語習得」を目指さねばならない。

- ・教授法の変遷
- ・第一言語習得と第二言語習得(学習)の過程の違い
- ・バイリンガルに育てることには気をつけたほうがいい。ことばでアイデンティが確立される。(マルチリンガルでも自我を確立していることばは一つである)
- ・ことばは二次元・線状性の表現であり、文法は二次元のルールではない。
- ・場面を設定してi+1をどのように教室で展開していくかということが大事。
- ・「ことばは使われてこそ意味がある」ということを念頭において、実際に使える日本語を教えなければならないと思った。
- ・使い方を教えるべき。コミュニケーション能力を上げるために。
- ・言語習得過程において、子どもの例を、先生の体験を通した話は、印象深く忘れないだろう。
- ・動物と人間の行動のしくみ
- ・習得する言語を覚えると、考え方などもその言語を使っている国や文化の人たちのようになるという理論は納得。
- ・教授法の流れをザッと教えていただいたが、もっと詳しく教えていただきたいところがあって、少し残念だった。
- ・第一言語の習得のしくみ。人間の脳はすごい。
- ・年齢に相応しい言語を習得させる。
- ・言語がないと思考ができない。
- ・「第二言語習得」といわれる中に様々な視点で異なる論がある。包括的な理論は…。
- ・第二言語を学習し、使用できるようにならないと、本物の習得にはならない。
- ・「子どもが5～6歳になると、大人のことばの間違いも直せる」という話。実際に教室と一緒に連れてきた学習者の子どもが大人の日本語を直したのを数回経験している。
- ・「習得」ではなく「学習」になっている現実はしっかり理解できた。
- ・カラスは7つぐらいの数までは「多い／少ない」が認識できる。身近な動物は思考しているように見えても人間と同じようには認識していない、など人間と動物の違いの説明がおもしろかった。
- ・「速読法」は線状的ではなく、絵画的に捉える方法である。
- ・第一言語は「先着1名様」である。言語がアイデンティティーの確立に決定的な影響を与える、などの話が大変興味深かった。
- ・何とんでも「ことばは使われてこそ武器になる」という先生のことばが印象的。
- ・辞書的な意味だけでなく、そのことばの「使い方」を教えなければならない。
- ・うわべの意味を教えるだけでは不十分であること。
- ・習得と学習=L1とL2
- ・人間のことばは二重文節構造(言語を組み合わせる新しい表現を作る)
- ・第二言語は自然習得はできない。

- ・クラッシュェンのモニター理論
- ・人間が人間として生きていくためにことばがいかに重要であるかということ。ことばがなければ概念形成も思考もできない。夢の話も etc…
- ・バイリンガルにするために、幼い頃から強制的に第二言語教育を強いると、弊害をもたらす。
- ・「使いこなせるから言語である」教える際に心がけているつもりであるが、難しく準備不足だと、ついつい教科書を使ったお勉強のお手伝いになってしまいがち。反省している。
- ・第一言語と第二言語の習得。学習に対する基本的な考え方。特にあまり小さいうちに第二言語を学習させるのは好ましくない、という考え方は最近話題になっている英語の早期教育の是非の問題と関連があるため興味深かった。
- ・プリント1ページ目の「脳の異なる部分で文法・アクセント・文章が処理される」という話。
- ・クラッシュェンの習得・学習説
- ・「学習者にとって役に立ち武器となる日本語を教えなさい」との先生のことば。
- ・言語の線状性ということについて。
- ・L1がL2の侵略を拒む。
- ・第二言語習得にはインプットと共にアウトプットが重要である。
- ・学習者にとってコミュニケーションがおこなえる「i+1」の授業が大切。
- ・言語の本質が線状性であること……二次元であること。確かに納得できたが、ことばを発する人の表情・声の調子などを加味しながら人間は会話の中に存在する状態になるのであるから、言語は立体的で、かつ三次元であるとも定義できないか。
- ・バイリンガルを急ぐと、アイデンティティー確立の障害になる。
- ・以前に聞いたことのある内容もあったが、中にはまったく忘れていたものもあり、クラッシュェンのモニター理論などはあらためて印象深く感じた。
- ・人間の言語、線状性からの捉え方——時間の意識・予測・判断能力
- ・人間の思考と動物の思考との違い——ことばと文化など。とても興味深く楽しかった。
- ・今日の授業は我々ボランティアに必要なもの。ことばは使われてこそ武器になる。使って役立ってこそ価値あるもので、場面の中で使ってみせる、それが大切。意味だけを教えるのではないという先生の意図が伝わった。
- ・第二言語習得の前に第一言語の習得についての研究が必要なこと。
- ・言語は線状性の表現であり音楽・演劇と同類である。絵画・彫刻はその対にあること。
- ・コミュニケーション・アプローチについて（個人的に）勉強の必要性を強く感じた。
- ・人間の思考はことばによって成り立つということ。
- ・第一言語取得と違って第二言語習得は学習である。
- ・言語習得として動機付けが大切である（学習者の動機付け）
- ・コミュニケーションの本質

- ・今までの「会話」の指導方法が間違っていなかったか、反省。会話の指導は、単なる知識の学習ではなく、それが使われてこそ武器になるのだということを認識した。
- ・第一言語は学習しなくても誰でも習得している。不思議である。しかし、幼い時にそのような環境におかれないと話せるようにならない。
- ・自我を確立するためには、まず「一つの言語」を習得することが大切であるということ。
- ・話せるようになるということ＝ことばの知識として学んだだけでは会話力にならない。説明調の教えは、話せるようにできない。

「i+1」の内容をもう一度聞きたい。

- ・誤用分析で負の転移を、以下の例で具体的に説明して下さったのでわかりやすかった。

北村です—— ○北村じゃありません。

寒いです—— ×寒いじゃありません。

こういうふうに生徒を目の前にしている私たちが「ああ、そういうことにあの理論が結びついているのだな」と、具体的にわかるとうれしい。

- ・誤用分析研究で、言語干渉（正・負）以外の要因が発見されたこと。
- ・習得と学習の違いがよくわかった。
- ・ことばというのは使わなければ消失してしまうこと。
- ・学習したことばを積極的に実際に使える場面を教科書の文型だけでなく実生活上で使える文型をも考えないといけない。

●「日本語教授法Ⅰ（一般外国語教授法）」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

- ・教授法の歴史的流れ
- ・教授法の種類は30以上もあること。
- ・直説法にも①オーラルメソッド②ベルリッツメソッド③グアン式(シリーズメソッド)など、いろいろあること。
- ・日本語を教えることは頭でっかちではなく、やさしさや巧みな技が必要。これは経験によって培われるもの。
- ・自分が授業を担当すると、いつも時間が足りなくなるが、会話文を穴空きにしてプリントを作りペアを組んで覚えるようにしていた。先生の「会話」を覚えさるということばは心強かった。
- ・講師は事前に相当な準備をしている様子だ。
- ・教授法の「方法」「長所」「短所」の説明を先生が1回さらりと呼んで終わらせてしまった部分はメモするのが大変だった。
- ・先生がわかりやすくポイントを絞って教えて下さったので理解しやすかった。
- ・教授法の変遷。過程に様々なものがありそれぞれが興味深い。
- ・「教授法」の提唱時期(必要となった時期)は比較的新しいものであることが印象的だった。
- ・「教授法」の名命法が提唱者、方法、基礎理論等、まちまちでわかりにくい。

- ・最後に提出された「ラ」行音のこと。発音困難な音の指導法には万全の解答がない。
- ・「学び」より「業」= 経験
- ・教授法の流れ(外国語教授法) がだんだんわかってきた。昔、英語教授法を勉強したはずなのに忘れていた。
- ・教授法の種類。それぞれの長所短所など。先生の講座を聞きながら自分なりにそうだと納得したり、半信半疑に思ったりした。
- ・最後の具体的指導についての質問解答が良かった。
- ・最後の新聞コラムに同感。「技」が大切。
- ・教授法の分類法は人によっていろいろあるらしいこと。
- ・それぞれ長所・短所があり、日本語はそれぞれ使い分ける。
- ・学びとワザ。ワザは経験で身につく。
- ・教授法と心理学が密接な関係を保っているということ。
- ・相手をリラックスさせるよう心がけて教えることが大切だと思った。
- ・今まで知らなかった教授法、特にサジェストペディア、サイレントウェイなどの教授法の話が聞いたこと。
- ・外国語教授法は基本として知っておかなければならないものではあるが、もう 20 年近くたってしまうと、人名や教授法の記憶はかすかにあるものの、すっかり忘れてしまっていることにわれながら驚く。あらためてまたその特徴などおさらいさせていただき、以前に勉強した本をまた出してみようかと思った。
- ・教授法に関する本の紹介がありがたかった。
- ・出された人名はほとんど初めて聞いた。
- ・いきなりの小テストが印象的だった。前回は始めて話を聴き、先週末は北村先生の問題集を読んだだけだったので全くテストはできなかった。
- ・教授法の流れがわかってとてもうれしい。
- ・最初に問題として教授法の勉強をしてから再び問題としてよくわかった。
- ・日本語教授法も祖先は外国語教授法の一つ。日本語教授法を学ぶ前に外国語教授法を学ばねばならない。
- ・日本語教授法について日本語の呼称がほしい。
- ・コグニティブ・アプローチ(認知論学習法)について。
- ・練習問題で基礎理論の用語が難しかったこと。
- ・いろいろな教授法があり、どの教授法を使うかは、その時々に応じて考えていく必要があるということ。
- ・時代と共に指導法も変ってきたこと。
- ・四技能(話す・読む・書く・聞く)の詳細について。
- ・教授法の種類が何十種類もあるとは驚き。
- ・直説法とかオーディオリンガル・メソッド コミュニカティブ・アプローチなどことば

は聞いたことがあったが、より詳しく説明していただいたので少し理解できた。

●「日本語教授法Ⅰ(初級の日本語教育)」の授業で特に印象に残った点としてあげられたもの

- ・初級指導法としては広告業界で用いられている「AIDMAの法則」を使って学、習者に興味を持たせ、ことばを発するという行動を起こさせる手法が有効である。
- ・コミュニケーション・アプローチの原則は「形式」(文型)ばかりではなく、「メッセージ」(内容)に焦点を置く。
- ・学習者が学んだ日本語の使い方で、社会的に不利益を蒙ることはいけない。
- ・コミュニケーション・アプローチでは、学習が初歩であればあるほど、準備や工夫が必要であることがわかった。
- ・帰納的指導：いくつか複数の例を示し、その中から規則(使い方)を会得させる。
- ・This is a pen. Is this a book?などは、実用表現なのではなく、文型を覚えさせるための作為的表現だった(?)
- ・ファンクションの重要性……実生活で使える表現に!
- ・コミュニケーション能力をつける為にはFunctionが大事 → 場面シラバス、状況をもつと生活に密着させたもので教える……本当にいつもそう思う。
- ・講師への質問が多かったこと。
- ・授業では補助具をたくさん使うことで効果的になる場合があること。
- ・先生のユーモアで、授業中、笑い声が絶えないこと。
- ・教室活動としての「具体例」は知っているつもりだったが、実際にやってみると(間違い探し)、活動の狙いや意味を深く知ることができてよかった。
- ・実例をもっとたくさん教えていただきたくなった。
- ・実生活で使える例文を作ること。
- ・様々な小道具の活用。指人形を使つてのスキット演技は、小学生指導に早速使ってみようと思う。
- ・先生が、ボランティア教室でも機能シラバスを重視されていること。
- ・実践性(実用性)を重視すること。
- ・紹介していただいた教室用の小道具類もおもしろい。
- ・泳げなくても海に入れるという論法はスパルタ式ではあるが、会話力も伸ばす。
- ・「～てあります」のfunctionの実例。「～てあります」の例文を羅列しても、必要のない場面設定は無駄ということ。
- ・指人形で会話を実演するのは学校支援に役立ちそう。
- ・「て形」に出てくる音便をまず隠して、2拍の音を示した後に正しい3拍の形を見せることが必要ということが役に立った。
- ・『みんなの日本語』のスタイルがよくわかって有益だった。
- ・オーディオリンガルだけでは駄目。

- ・必ずファンクションに戻る。
- ・日常生活の中で実際その文型が使われている場面を考える。
- ・コミュニカティブ・アプローチ。正確さよりも役立ったかどうかが大切。
- ・インフォメーションギャップは日本語で表現しやすいことが大切。
- ・学びながら使う、使いながら学ぶ。ナレーションにしないでファンクションで。
- ・文型の意味が解っても実際その文型がどんな場面で使えるのか、学習者にはわからない。
- ・function シラバスでは場面設定は複雑になり過ぎないようにすること。
- ・先生が見せてくれた帽子のゲーム。
- ・指人形、帽子を使ったゲーム等、コミュニケーション能力を伸ばすための工夫について。
- ・コミュニカティブ・アプローチにおけるよい例文の出し方。
- ・イラスト以外によるインフォメーションギャップのやり方。
- ・「て形」の定着のさせ方。
- ・「て形」練習のための三つ折のフラッシュカード。
- ・日本語学校とボランティアの日本語教室の教え方の違いがわかったこと。
- ・コミュニカティブ・アプローチにおけるゲーム的な教え方（帽子を利用して自分が見えないものを当てるゲーム）が、ことばを覚えるだけでなく、コミュニケーションにも役立つことがわかった。
- ・会話学習での「流暢さ」とはどういうことか、わかった。
- ・小道具（帽子、指人形、ピンポンボール）の利用の仕方。
- ・インフォメーションギャップのゲーム
- ・難易度だけでなく、「覚えて役に立つ」「使って得をする」日本語を教える。
- ・ボランティアこそコミュニカティブ・アプローチで教えてほしいということ。
- ・先生の、我々のレベルをご理解いただいた上での授業が興味深い。
- ・コミュニカティブ・アプローチの手法の難しさが印象に残った。しかし、絶対にこの方法が一番身につくと思った。他の言語の学習で体験しているので非常によくわかる。
- ・言わなくても通用する表現は習う意味がない、ということが一番共感できて印象深い。
- ・文型をどこまで忠実に保持するかに関しては、現実を使う既出の表現を盛り込んでも良いという点も印象に残った。
- ・流暢であるということが、発音、イントネーション等のことではなく、いかに自分の言いたいことが伝えられ、また人から聞きたいことが聞き出せるかであり、正確さだけではないことだということがわかった。
- ・function という視野も入れて例題を出し、文型を使う場面をわからせること、使うチャンスのあるものを引き出す、言う必要のないことを言わない。大切でもあり厳しいことばだ。
- ・消費者の購買行動に繋げる AIDMA の法則の話は懐かしかった。

「Attention→Interest→Desire→Memory→Action」 昭和 40 年代に学習した記憶があ

る。日本語教育にもこの原則を当てはめられることに感心した。

・学習者のニーズに合わせた授業：先生のご指摘のように、ボランティアの教室においてはなかなか難しいが、いつかやってみたい。

・コミュニケーション・アプローチ → まずは実践でやってみようと思った。

・ウィルキンズのノーショナル・ファンクショナル・シラバス

・ジェネレーション・ギャップの手法

・適切な文型導入のやり方が大いに参考になった。

・「実物」はいい。毎回何かしら使用する実物を見せただけのはとても参考になる。

・教案の作り方（考え方）

・実際に会話を育てるということは、「お勉強」ではなく、実践的に使える方法を考えていく必要があるということ、教える立場はもっと苦心して努力しなくてはいけない。

・機能的な面から教えること。

・書く事も学習。

・先生がいつも簡単にコミュニケーション・アプローチの実例をやってみてくださり、なるほどと感動ものだった。自分で、となると、産みの苦しみだ。自分の日常生活でやっていることは、日本で暮らす外国人にとっても日常であることが大部分だと思う。自分のことをよく振り返ってみたい。

・教室活動において、学習者のニーズに合わせながら社会の中で役立つ指導をすることが大事である。

・コミュニケーション・アプローチの理論を実際の授業の中で活用する難しさを痛感した。

・今まで『みんなの日本語』を深く勉強せずに学習者に教えていたが、今日話を聞いて、自分なりに少し手を加えて使える文例などを考えようと思った。（学習者が必要としている場面で使える文例）

●「日本語教授法Ⅰ（中・上級の日本語教育）」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

・豊富な例文を提示しなければならないこと。

・学習者に合った教え方をし、学習者の一言一言に注意を払って教えること。

・日本語教育の現場で、初級、中級、上級の定義が曖昧になる。

・文法訳読法とコミュニケーション・アプローチの両方の重要性がわかったが、実際どちらをどれだけ取り入れて教えるか判別するのはとても難しいと思う。

・中上級の教材選択が教師各人によって異なり、それによりレベルも違ってくるということは、生徒への影響力がまちまちなので、熟練した教師が必要だとあらためて実感した。

・基本はきちんと押さえて、生徒の作る文章に柔軟に対応したい。

・「インシュタイン先生の思い出」のような長文が中級レベルで出てくること。

・本日、授業中に解いた「第 11 課練習 B」のような内容の問題に時間をかけて、「コミュニケーション・アプローチ」の説明の時間がなくなった。問題を解かなくてもよかったので

はないか。

- ・読解指導（文法訳読法、コミュニケーションアプローチ）のやり方。
- ・例文の作らせ方。「～まい」「～てはじめて」「むしろ」「～ようとして～」
- ・基本と応用との相違。
- ・中級の指導は「文法訳読法」になりがちであるが「コミュニケーション・アプローチ」的アプローチに発展させ、そこまで到達しなければならない。
- ・漢語を和語に言い換える。
- ・答えはいつも1つとは限らないこと。
- ・今まで初級の学習者しか指導したことがなく、また中・上級を対象とした指導方法なども経験したことがないので、その違いが何となくわかったようなのが収穫だった。また、文法訳読法とコミュニケーション・アプローチの違いに対する認識がようやく整理できてきたのが良かった。
- ・例文列挙作業
- ・日本語教師としては、その場で例をスラスラ出せるようにならないといけない。日頃は家で準備して来てしまうので、その場では出しにくいことに気づいた。
- ・今日は中・上級の日本語だと思って来た。「読解」に特化されるとは思っていなかった。
- ・「聴く、書く、話す」についても学びたかった。
- ・読解における文法訳読法の学習方法
- ・コミュニケーション・アプローチの取り入れ方（発展のさせ方）
- ・コミュニケーション・アプローチについて、全部聴講できなかったのが残念だった。
- ・教材の選び方次第で、生徒が楽に読解力がつくかどうか決まると思った。
- ・現場を把握していない指導法について考えてしまった。
- ・「まい」は日常ではあまり使わないので（中高年を除く）、文章での例文が好ましい。
- ・中級は多用な授業していける一方、教材選びや教え方等、本当に教師の力量が問われることがわかった。
- ・ボランティア活動では、中上級者に対する指導の場はほとんどないが、知識として蓄積しておけば今後の活動に役立つと思われる。
- ・今日的には、コミュニケーション・アプローチが新しい手法と思われるが、ボランティア活動の日本語教室ではなかなか実践に移すのが難しい。
- ・読解には、「文法訳読法」的アプローチと「コミュニケーション・アプローチ」的アプローチの2種ある。
- ・コミュニケーション・アプローチを押し通したこと。
- ・指導者も必ず練習問題を解いてみる必要あり。
- ・いろいろな指導法があるが、どれを取り上げてすべきか考えることが大切。
- ・訳読法の指導法とコミュニケーション・アプローチ的アプローチの区別が混乱してしまった。

・文法訳読法とコミュニケーション・アプローチの両方うまく使って授業をするのが一番良いのかなと感じた。

・中級への移行は、初級から滑らかに移行するのではなく、急に難しくなるように思えた。

●「日本語教授法Ⅱ(子どもの日本語教育)」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

・学習の「継続」が大切であること。

・子どもには親の価値観を否定する時期があること。

・核となる言語を持つということ。

・母語、母文化と日本語支援との関係について。

・先生が携われた日本語支援の経験談

・子どもの日本語教育というと昔は帰国子女が多かったが、今では外国籍の児童生徒、日本語を母語としない子どもなど、多様化している。全員が排除されないことが必要。そして、子どもには一切責任はなく、全て大人の都合である。縁あって日本に来たのだから日本に来て良かったと思えるようにしてあげることが必要である。

・子ども達に学科を教える場合、まず母語で自己紹介をさせ、表情などからその人となりを知り、日本語はわからないということを理解して教えることが肝要である。

・生活言語能力は、目標言語が使用されている場で数ヶ月から 1 年で習得されているが、家庭生活言語能力は学習者の環境によって差が出てくる。

・生活言語と学習言語の身につけ方の違い。

・先生から聞いた日本語教育の様子がとても印象的だった。ボランティアの先生は、大変な状況で辛抱強くすごいな、と思う。

・新宿子どもの日本語教室の「母語タイム」と「日本語タイム」

・BICSとCALPを説明された際に、言語習得をリュックに例えたこと。(とてもわかりやすかった)

・文化的な背景を持った言語は理解しにくい。→ 指導者も見落としがち。

・核となる言語の確立が必要。

・母語タイム・日本語タイム → 学習者にとって自己表現ができる時間があることはいい。自信に繋がる。

・言語発達、生まれてから 10 歳前後までが大切。

・生活言語は必ずしも容易に身につくとも言えない。

・他地域のボランティア教室の実情を知り、自分の所属している教室と比較して参考になった。

・学校からの「おたより」の読み方、扱い方が参考になった。

・外国にルーツを持つ親が教室に「参加」という実情が参考になった。私達も検討しているので。

・生活言語能力は、日本で長く生活していれば自然に身につくと考えられがちだが、実は

そうではないという事実

- ・核となる言語としての日本語習得と母文化の大切さを指導者は理解して指導に当たる必要がある。

- ・生活言語の語彙数を増やすことの大切さ。

- ・生活用語の中にも家庭生活用語と学校生活用語があり、家庭生活用語が不足しているということを再認識した。また、その疑似体験をさせて教えるということは全く考えていなかったのが参考になった。

- ・日本語指導が必要な子ども達の「大人の責任」

- ・現実の場面・環境に会話の設定を合わせる。場面は無いより有る方がいい。

- ・学習言語と生活言語との違い

- ・生活言語能力はすぐに身につかないということ。

- ・生活言語の語彙が圧倒的に少ないということ。

- ・自己を形成する「核となることば」という概念

- ・母語にせよ、日本語にせよ、核となる言語をしっかり持たせてやるのが大切だということ。

- ・新宿子どもの日本語教室、日本在住の、外国にルーツを持つ講師が母国の子ども達に日本語支援活動をする話

- ・臨界期を過ぎて来日して、母語の読み書き能力も無い子の場合の話

- ・ボランティア教室の運営は難しい。大切なのは現実に合わせること。

- ・学校からのお知らせや、給食の献立の必要な所だけ取り出し、お母さん達に教えるという話

- ・学校の勉強についていける日本語の底力のつけ方。特に説明と発表の機会を増やすことが大切。

- ・日本語指導が必要な児童の数、内容やその受け入れ体制の実態がわかったこと。

- ・「学校生活言語」と「文化的背景を伴う日常生活言語」の話

- ・「母語、母文化と日本語支援」で子どもを3つのグループに分けての考え方

- ・最後に聞いた「3つのグループ」の少年の話

- ・日本語指導が必要な外国人児童生徒の母語が、中南米のポルトガル語、スペイン語が多いということ。

- ・先生が係わられた日本語支援の事例それぞれ。

- ・いろいろな指導の経験談は、1つ1つ思い当たることがあり、参考にさせて頂きたいと思う。

- ・JSL児童の分類の定義に難しさがあること。(外国籍児童生徒、日本語を母語としない子どもたち……など)

- ・子どもの言語背景、環境が複雑になっている。

- ・日本語の押し付けにならず、各自のニーズを大切に、継続しておこなえば成果が必ずあ

る。

- ・生活言語能力が学習する上での重要な factor である。
- ・臨界期を過ぎて来日しても、母語をしっかり身につけてきた場合、実用的バイリンガルになる可能性が1番高い。
- ・最低1つは「核」となる言語を持たせることが必要。これは同化ではない。
- ・文科省がHPに載せた JSL 児童の定義に、今年から「学習活動への参加に支障が生じている児童」という文言が書き添えられたことは画期的だと、先生が語気を強めておられたが、私も同感である。
- ・学校との付き合い方のご苦勞はとても印象に残った。学校と常に円満な関係を保つことは本来の活動をしていくためにとても重要である。
- ・生活言語が貧困であるために多くの子ども達の学習がなかなか身についていかないという説明は、頭を殴られたようにショックだった。
- ・先生の落ち着いた、しかもしっかりした話し方に、現場に携わっている先生の努力、暖かさ、説明の的確さを感じた。
- ・現実に合わせて。それぞれ得意なものを出し合って大きなものができる。文化的背景や、いろいろなことばの奥にある経験の重さを感じた。
- ・文部科学省調査のデータ分析：自分の先入観との多少の「ずれ」を再認識した。
- ・日本語支援活動に対する日本の行政の対応が遅れがち。
- ・日本語支援活動は地域の連携が大切。主催者（場所の提供者＝含、学校）との協調が大切。
- ・「多文化共生の実現のために」と長い間いろいろな所で言われているが、言われているということは実現されていないということである。それだけ難しいということである。
- ・条件的習得と概念的習得が交差する時期が10歳前後である。その時期が1番大事な時期。
- ・核となる言語としての日本語習得。自己表現ができるように、自文化の確立と自己のアイデンティティーの確認のための日本語支援が必要である。
- ・「言語能力がないように見える子どもは、本当は能力がないのではなく、日本語能力がまだついていないだけ」は同感。日本語挨拶の模倣など、基本的な言語表現から無理なく言わせて、自分の能力に自信を持たせることはとてもいいことだと思う。
- ・就学前、あるいは就学後、いわゆる臨界期に日本へ来た子どもが、日本語の習得時に、何語で考え、何語で話すか、という基になる言語をしっかり身につけさせる必要があること。
- ・自文化の確立と自己のアイデンティティーのこと。母国、母文化ではなく、自己、自文化の考え方は納得した。
- ・日本語指導もやはり「継続は力なり」であること。実際の指導は一進一退で効果がないように思えても、続けることが大切、ということであらためて思った。
- ・母語で話せる機会があると、その子が生き生きとしている姿を見ることができる。

- ・少人数の教師での日本語教室は、さぞ大変なことと思う。
- ・生活言語能力はすぐ身につくとは限らないこと。
- ・①核となる言語の確立。②自己表現のできる言語。思考に用いられる言語を持つ（何語であれ）③「自分は～人だから」という国籍にとらわれない自己のアイデンティティーを持てるようにすること。
- ・文部科学省調査の中での在籍人数別学校数。
- ・地域に住んでいる子ども達の教育上の手当てが必要なこと。
- ・核となる言語を持つことが大事。
- ・外国人児童生徒の現状について、約3万人が日本語指導を必要としている。
- ・文化庁が子どもの日本語指導に力を入れ始めたことがよくわかった。
- ・同化でなく、核となることばを持たせてあげる（自己表現ができることば）ということが重要だと思った。

●「日本語教授法Ⅱ(学校派遣としての教育)」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

- ・行政側などとの実りある交渉をする必要がある。具体的な内容をしっかり伝える。
- ・ボランティア等に丸投げ！？というやり方ではダメ。
- ・学校派遣の学習は、限られた時間でトータルにこなす必要がある。
- ・学校派遣の形態として、学習者の授業中の取り出し、入り込み（ひつつき）、放課後補習がある。放課後は学習者が疲れているなど、もともと理想的なものではなく問題があり、いろいろ工夫されていくことが必要である。
- ・「教室が本来の居場所になること」が児童本人のためである。いつ日本語学習支援から手放すか……。原則 40h or 80h。「成績がクラスの中位になったら」が一つの目安。
- ・担任教師とのコミュニケーションは重要で、連絡帳は1つの方法。先生からの要望には自分が得意とするところをできる範囲で対応する。
- ・子どもの存在を丸ごと受け容れる。ただし、教師との相性などがあり、理想的にはいかないが、こちらの気持ちは相手に伝わるので注意すること。
- ・各グループの発表内容から共通して、教委の中には日本語教育に対して無理解なところがある。それに対してボランティアの献身的な活動は対照的に思えた。
- ・教科の勉強が日本語の勉強になるようにとのアドバイスは、これから意識していかなければと思った。
- ・「愛情を持って丸ごと受け容れる」ように努力したいと思う。
- ・取り出し授業や入り込み授業の問題点は、今まで気がつかなかった点もあり、役に立った。
- ・グループワークはとてもいいと思う。日頃の鬱憤を話せる場が持てた。それに他市の現状も垣間見ることができて、よかった。
- ・9月末からこの研修講座が始まったが、それまで他市の情報を知る機会がなかった。今

日はいろいろな情報を知ることができて大変参考になった。

・「生き生きと表現できる日本語の底力をつける」このことばを忘れず、今後の目標としていきたいと思った。

・グループでの話し合いが有意義だった。

・学習意欲のない(育たない)子はいない。

・その言語固有のリズムがある。

・グループディスカッションで現状を紹介してもらえたのが印象的。

・ディスカッションで、船橋の方の ①日本語教師の中で、生徒の「母語」のできる人を教委が選んで派遣するという話。②外国人の子どもを1ヶ所に集めて日本語を指導していること。

・担任はクラスの中で、日本語のわからない生徒の存在を気にしているということ。

・我々の学習者への目標が「在籍学級へ戻し、自分の居場所になるようにすることだと私も思った。子どもからのサインを見逃さないようにすること、手放す時期を正確に判断できるようにになりたいと思う。

・1人の人間としてプライドを尊重すること。

・生活言語が一見問題なしの子が、学習面や友人関係で問題がどんどん出始めて、支援要請が来るのが遅くなった例があること。

・母語が理解できる日本語ボランティア（特に、タイ語、スペイン語、中国語など）がたくさんいることは羨ましい。日本語ゼロの中学生には母語ができる日本語ボランティアがいることは効率がいい。

・いつ「取り出し」を終了するかタイミングを見極めることは難しいが、自立を促すため背中を押してやることも大切である。

・指導の時間には制限があるが、授業を受けたくない状況の時には、その状況を受け止めてあげることも貴重である。

・そのボランティアが得意とすることを子どもの学習に役立てれば良い。

・学習意欲のない子どもはいない。意欲がないとすればその原因は周りの大人と環境である。

・学校の教科を見据えて対応していく。

・できるだけ早く教室に戻す。

・受験（面接と作文）の問題。

・できる範囲でできるだけのことをやること。

・グループの話し合いで、各市の現状を知ることができた。

・グループ毎のディスカッションにより他市での日本語派遣の現状がわかったこと。

・指導する子ども達に自分達ができる範囲で最善を尽くす。

・外国人の子どもの担任をする先生の気持ちや、日本に来たばかりで壁に囲まれたような気持ちになった外国人女性など、具体例を出してお話いただきとてもわかりやすかった。

- ・先週に引き続き、先生の子どもの指導に対する考え方と姿勢、および経験に基づくわかりやすい説明に感動した。(お世辞ではない。非常に説得力があった。)
- ・グループ毎の話し合いの中で、本来子どもの指導の中心となるべき教委と学校(地域によって差はあるが)の理解と認識が全般的にまだまだであることがわかった。
- ・市によって学校派遣のあり方が違うこと。
- ・この講座に出席している方々のうち約半数もが学校派遣に係わっていること。
- ・グループ毎の話し合いの内容、例えば、教委、学校、通訳の問題等が印象に残った。
- ・JSL 児童の現状を知る人が教師、教委等とコミュニケーションをとり、働きかけ、地道に問題を解決していくことが大切。
- ・取り出し授業が長ければ良いというものではないということ。
- ・目標は、「その子にとっての居場所が教室」になること。
- ・「教科志向型」とは「教科についていけるための日本語」を教えることを目指す。
- ・グループでの話し合いの中で、近隣なのに市が違うだけでこれ程までに制度が違うのかとびっくりした。
- ・講義は前回同様、実りあるもので、実態をご理解されている内容に何一つ不明な点はなかった。
- ・先生のプリントには、私たちが学ぶべきことを理論的に順番に書き上げてあり、それに沿って充分大切な説明をしてくださっているので引き込まれる。先生の愛情と情熱をいただきたい。
- ・学校派遣の形態はいろいろだが、今回の受講者の多くは、市教委の委嘱を受けての活動であった。ボランティア独自での活動は少ないようだ。
- ・加配の先生が日本語教育の経験とは関係ないこと。
- ・「入り込み」という形態(それ以前の「ひつつき」という名称にはビックリした。)
- ・担任教師とのコミュニケーションの大切さ。
- ・子ども達への日本語支援の形態と場所が問題であること。
- ・学校派遣の教育の現状と課題。グループ毎の情報交換で他市の状況を聞いた。
- ・学習意欲の持たせ方。
- ・「同じ材料を使っても切り口が違う」ということを理解していなければいけない。
- ・各市によって子どもに対する対応がかなり違うということがわかった。
- ・教委が JSL 児童日本語教育の実態を知らない場合が多いということが驚きだった。
- ・子どもはわからないことが嫌い……本当にそのとおりだと思った。外国人の子どもでも日本の子どもでも同じだと思う。
- ・皆さんの熱意に感じ入った。
- ・日本語支援者の留意点について。
- ・日本語教育はトータルで考えて指導する必要がある。
- ・グループディスカッションの発表結果も参考になった。

- ・各市で子ども達に対して学校で支援されている現状がよくわかった。
- ・教委から国際交流協会へ話が来るといろいろ大変なようで、直接ボランティアに話が来るようにした方が良いのでは、と思った。

●「日本語教授法Ⅱ(教科志向型の実際)」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

- ・ビンゴゲームの配慮の仕方など、偶然をよそおう意図的操作もあり(?)
- ・子どもの日本語を学ぶ過程：考える力を育てる。心の発達にもかかわる。(大人との大きな違いあり)
- ・読み聞かせの方法について。
- ・子ども達の緊張を解きほぐすために「四技能重ね塗り方式」を用いる。
- ・TPRは、聴解力を重視し、聞いたことに全身で反応する方法。わからないことばでも体を動かすことにより理解し、ことばに反応する。(講義の中で体験し、よくわかった)
- ・i+1のinputは与える側が工夫することにより、いろいろな教材が作れる。
- ・教科書は子どものプライドを傷つけないよう、学習のレベルに合わせて使う。(レベルを落としてもよい)
- ・手作りの教材の多様さ。
- ・たくさんの参考書、資料を紹介していただくこと。
- ・先生は、画と歌が上手なこと。
- ・授業内容がわかりやすく、実践することができると思う。
- ・ビンゴのバリエーションをいろいろ考えることができる点。
- ・(名探偵の)読み聞かせを実際に体験できた点。
- ・初期指導の方法。(いろいろなゲームなど)
- ・教室での子どもの居場所を持つためには。
- ・日本語指導と教科指導は統合の方向へ進必要があること。
- ・意味不明の言語でも指示されると行動できるという実験がおもしろかった。
- ・読書好きになる子に育てることが非常に大切だと思う。
- ・「読み聞かせ」の方法を具体的に示した先生に感激した。
- ・i+1のinput、TPR、VT法など、大変参考になった。臨機応変にいろいろなやり方をしていたが、各種の方法の利点を知って自信が持てた。
- ・小1男児の支援を始めたばかりなので、明日にも役立つ授業だったのでうれしい。
- ・教科書を参考にして教材を作ること。
- ・ビンゴゲームは、読み／書きの両方に使用できる。
- ・「文章の聞き取り」はことばの区切りがわかりにくいので、初期段階では単語のみを聞かせるように配慮する。
- ・カレンダーを使用する数字の指導は(子どもは興味を持たないものだが)、短時間でも継続して指導する必要がある。

- ・すぐに自己紹介をさせるのではなく、まず聞くことから始める。
- ・書くことが最後の押さえである。
- ・TPRの教授法は興味深かった。
- ・VT法(Verbo-Tonal Method)について。
- ・「四技能重ね塗り方式」での文字指導の具体的方法
- ・ビンゴゲームをやるまでの過程が、学習に十分に生かしていけるということ。
- ・それぞれの学習段階に合った「読み聞かせ」の活かし方についての具体的なお話
- ・TPRとVT法、共にわかりやすい説明でよく理解できた。
- ・ビンゴゲームをはじめ、ゲームを使ってひらがな、漢字を定着させる方法。
- ・「教科先取り、読み聞かせ」の具体的なやり方。
- ・「四技能重ね塗り方式」による指導方法。子どもがプレッシャーを感じず、楽な気持ちで学習できるようにすることが非常に大切であることがわかった。
- ・「あいうえおのうた」やビンゴゲームなどによる具体的な指導方法はとてもわかりやすく面白かった。
- ・ゲームのいろいろな仕方や工夫。
- ・「読み聞かせ」のテクニック。
- ・先生の失敗談として；漢字を見て子どもを見ていなかった例。私も、あれもこれもと教えたいことに囚われて、受け取る側の子どもの様子を見ていないことに気づかされた。
- ・引っ込み思案の子どもに注目して、その子に自信を持たせるような配慮が必要だということ。(ビンゴで早く上がらせるなど)
- ・ことばを教える際には、心の発達にも影響があることを配慮する必要があること。
- ・「自分で勉強しよう」という力をつけることが大切である。
- ・読み聞かせの方法がいろいろあること。
- ・Krashen & Terrelの i+1 の input, i+1 の output
- ・外国語学習では、言語固有のリズム、イントネーションをまず体得すること。
- ・「読み聞かせ」の必要性。
- ・偶然性(を装った)ゲームの方法。
- ・いろいろな教材と、単調にならない、子どもに合った指導法を教わった。
- ・子どもに無理なく、自然体で学習させる工夫。
- ・日本語支援にあたっての留意点や「四技能重ね塗り方式」→子どもが楽な気持ちで学習できるよう工夫することが大切。
- ・具体的な日本語指導の方法。TPR法を？語で実践。→教室に放り込まれた子どもは毎日、四六時中、これをやらされている。
- ・童謡、児童遊戯の利用。→リラックスした気持ちで楽しくできる。
- ・四技能重ね塗り方式……初めて日本語学習をする子ども達に対しての学習、i+1のインプットとアウトプット。

- ・歌に合わせて聞いて、文字を追う。ゲームで文字を、語彙を入れる。
- ・「読み聞かせ」の実践……「先取り読み聞かせ」（内容を知る）
- ・ひらがな表を早指しして練習 → なるほど、集中して見たり考えたりするようになると思った。
- ・偶然のゲームも意図的に操作して、効果を引き出す工夫
- ・教えるための引き出しをたくさん持っている、楽しい授業ができるということ。
- ・「四技能重ね塗り方式」での指導が大切であるということ。
- ・ゲーム遊び
- ・書籍の選び方
- ・ビンゴシート、大人にも使えると思った。
- ・先生が持参された語彙表記のビンゴゲーム
- ・実際に大人の教室でも使えるビンゴゲームなど、今後利用したい。

● 「日本語教授法Ⅱ(評価法)」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

- ・テスト用紙の作り方。
- ・今まで問題を作成したことがなかったが、テストの種類によって欠点、利点のあることを学び、今後作る時にとっても参考になると思った
- ・テストの種類による利点、欠点が勉強になった。
- ・項目ごとにわかりやすく要点がまとめてあり、理解しやすかった。
- ・以前受けた小テストは、この評価法の教材に繋がっていた事を知り、評価法がとても身近に感じられた。
- ・標準偏差、偏差値の出し方。
- ・今日のテーマ「評価法」は、いわゆる「日本語学校」の教師のテーマで、週 1 教室のボランティア教師はどう利用できるか。
- ・S-P 表、偏差値など真面目に今日、教えて頂き、少しわかりかけた。
- ・評価の目的・評価の種類がよくわかった。
- ・標準偏差について（数値が多いのはバラツキが大きいこと）
- ・S-P 表の S 曲線、P 曲線の作成および、読み取り方。
- ・偏差値の出し方を初めて具体的に学べた。
- ・内容が比較的やさしかったせいか、先生の説明も非常にわかりやすかった。
- ・昔から何回も耳にしていた「偏差値」の内容を初めて知ることができた。
- ・評価法については十数年前に学習したはずなのに全く覚えていないが、こういう表によって、学生の評価および自分の授業の評価ができることは大切だと思う。ただ、ボランティアの授業ではほとんどテストをしていない（小学生部）。高校受験の子どもを対象にする場合は必要になるかも。
- ・難しい内容をわかりやすく説明されている点。

- ・いつも当たり前に見てきた標準偏差、偏差値を自分達で計算したこと。
- ・S、P 曲線は知らなかったが、よくわかった。
- ・偏差値が、自分がこのクラスでどこにいるのかを示す数値であること（標準が50であること）がよくわかり、出し方までわかって感激だ。
- ・我々のテスト結果を先生が資料として作成されたが、その使用法、評価の目的、形式を具体的に学習できた。
- ・評価の信頼性と妥当性は特に大切である。
- ・偏差値の算出方法；勉強になった。
- ・評価の目的……多角的評価が必要。テストの種類。
- ・評価の種類が整理できた。
- ・何のために評価するのが大切。
- ・今まで自分が評価法について何も知らなかったのだということを認識した。
- ・S 曲線と P 曲線で、学習の達成度がわかるというのがとても役立った。

● 「成人の日本語教育に関するディスカッション」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

- ・テーマを意識して、ことばを選んで簡潔に発言すること。
- ・話をしながら、どこに着陸点があるのかわからなくなる話し方への反省。
- ・『みんなの日本語』の使い方。
- ・「ディスカッションのやり方」について、わかっているつもりではいたが、司会者、参加者の立場で考慮すべき点について、あらためて意識してディスカッションができたこと。
- ・テーマ1 『みんなの日本語』の使い方に参加。皆さんが『みんなの日本語』に不満を持ちながらも、いろいろ工夫して使ってもらえること。
- ・水書き筆のことを伺い授業にぜひ使ってみてみたいと思った。
- ・テキストだけでなく、普通体の会話をしたり、教材を別に用意したりして、できるだけ日常生活で使えることばを教えてあげる工夫が必要だと思った。皆さんもそう思っていたら嬉しいようなので、私もなるべくそのように努力しなければと思う。
- ・他の市でも先生が持ち上がりのクラスは良くないという意見が出て、驚いたが「同じ先生でないと話せないの」という理由を聞いて納得した。持ち上がりにも生徒の性格が見えてきて、親しくなる利点があるのではないかと思う。
- ・ワークショップは解決策を探る場であるということ。
- ・『みんなの日本語』の使い方に関してのグループだったが、こういう形で良い点や問題点を話合う機会を持ったことはとても有意義だった。いろいろな地区から来られた先生方の意見を聞くことができふだん思っている問題はどの先生も似かよったものを持っていらっしやるんだなと妙に納得した。
- ・司会やまとめ役はむずかしいと思った。(やっけてはいないが)
- ・効果的な「ディスカッション」の進め方は、司会の力量に大きく左右されることを実感

した。

- ・いろいろな人の経験を聞くことができ、自分の活動の参考になった。
- ・何となくやっている事も、あらためて話し合うと、問題点があることに気がついた。
- ・「授業でのロールプレイについて」のテーマで話し合ったが、『みんなの日本語』で提示されているロールプレイの問題点について認識を持ち、各々が工夫している。
- ・変わったスタイルの対話方式で印象的だった。
- ・実際教えているボランティアからの意見が提示される場合は、今回初めてなので、役に立ったと思う。
- ・人数が多くなると、全員発言が難しい。なぜ、教具教材を使うのか、メリット、デメリットについての話し合いに至らなかったという指摘がありがたい。
- ・「ディスカッション」は問題提起、「ワークショップ」は答えを出すことと知った。
- ・他の人との意見交換は、有益だと思った。
- ・「文型と教具・教材」をテーマにした私のグループのディスカッション、6名でおこなった。活発に意見が出され、それぞれみな参考になった。日ごろからみなさんが日本語の授業に工夫をこらされ、一生懸命取り組んでいらっしゃる感じが感じられた。
- ・文型により教材・教具を使いやすいものと、あまり使わないで教えるものがあるが、他の人達も同じ傾向があることがわかったことが面白かった。
- ・教材・教具について、いろいろな参考文献を紹介してくださったこと。
- ・ディスカッションの前に先生から司会者の留意すべき点と参加者の留意すべき点のご注意があったのは新鮮であった。何となくわかっているようで考えてみると、こんなに明確にご注意を受けたのは何十年振りかであったような気がした。ごく当たり前のことであったかも知れないが、実はきちんと意識して行わなければならない点であったと思う。
- ・導入方法、練習方法に関するアイデア。
- ・ディスカッションの仕方。
- ・3グループとして、ロールプレイのやり方を話合ったが、どのような場面を設定してロールプレイをしたら良いのか、全員が思案しているのだとわかった。
- ・とても活発に意見が飛び交った。皆それぞれ工夫して授業しているなと感心した。
- ・ディスカッションが有意義に進んだことは喜ばしいことだったが、司会の大役をおおせつかり勉強不足を実感した。ディスカッションは参加者一人一人が高い意識を持っていないと充実したものにならない。
- ・どのグループも活発にいろいろな意見が出たこと。それだけ教える上で各人が試行錯誤しているということが感じられた。
- ・ボランティア活動の日本語教師の方が教科書(多くは『みんなの日本語』)を中心に授業を進めており、教具をあまり使用していないことに気付いた。『みんなの日本語』の絵カードが多く使われているようだ。
- ・オリジナルの手作り教具の使用はほとんど皆無であった。

- ・ワークショップ前段としてのディスカッションであったが、『『経験』する』範囲を出ることはできなかった。
- ・ディスカッションの仕方やそれをワークショップに繋げる方法。
- ・いろいろ話したいことや感じていることがあり、皆さん多くの意見を出してくださったこと。活気があった。
- ・教材・教具についてはいろいろな工夫をしているが、共通した部分もたくさんあることがわかった。
- ・いろいろなロールプレイの場面で、どんな問題があるのか、わかってきた。教えている対象者によって、問題も異なってくるのだなと思った。
- ・いろいろなロールプレイの話題が出た。特に指導されている方々の問題点「1対1はやりにくい」との意見には、私自身も感じていることだった。

● 「JSLカリキュラムの概要I (トピック型概説)」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

- ・説明調の授業は、日本語会話力をつけることにならない。
- ・学習者、教師ともに満足感を得られる授業にすること。
- ・学んだ日本語が、「学ぶ力」になること、実際に使える会話になることが大切。
- ・カリキュラム≠マニュアル。
- ・JSLカリキュラムというのは、日本語が十分でない子どもを対象としたカリキュラムであるが、教材を考えることによって、大人の日本語学習にも使えるということ。
- ・大人は理屈を求めるが、理屈に頼って教えてはならない。「今日は～を教える」という授業の「へそ」を作っていくことが必要なこと。
- ・音声学のQ&Aで、外国人の苦手な音を知ることができて今後の授業に役立てそう。長年、疑問に思っていたことがわかって安心した。
- ・レポートで出た質問に答えてくださったのがためになった。(実践的)
- ・AUカードで使われている基本形とバリエーション、働きかけと応答に関する表現はともいいと思う。日本語教室で場面シラバスを考えて設定し、取り入れたら生徒が喜ぶかも……。
- ・AUカードを初めて知った。とても興味を持った。
- ・アイデンティティーを確立する言語を何にするかはとても大切なトピックだったので、もっと時間があつたらいろいろ質問できたのに……と思った。
- ・これまでの質問に対して補足説明を加えていただいたことが参考になった。
- ・取り出し授業は日本語指導だけではダメ。学校生活支援なども要請される。
- ・10歳過ぎの子どもはすでに母語が身に付いているから、第二言語を跳ね除けるところがあるが、母語により自我がおおむね形成されているから人格育成の点では安心だ。
- ・子ども達には認知能力がすごくある。
- ・JSLカリキュラムは子どもだけでなく大人の日本語教育にも共通のもの。

- ・日本語を通して「学ぶ力」を育てる。
- ・授業の「へそ」を作っておくこと。「本時の目標」をいつも意識すること。
- ・これまでに出了た質問事項に対する回答の時間を設けていただいて大変よかった。いつ答えてもらえるかと気になっていたところだった。
- ・10歳以前の子どもの日本語教育は「日本語を使用して人格を形成させる」ことに関わってくるということなので、このことに関する指導者の役割は責任重大であると再認識した。
- ・前回のワークショップ、A、B、Cグループ。
- ・出された例文により、副助詞「は」と、格助詞「が」の違いがはっきりわかった。
- ・AUカードをどのように使うか。
- ・アイデンティティー確立に関する10才仮説
- ・先生の話術。
- ・いつものことながら、非常にわかりやすく、かつ面白かった。
- ・教材と使い方について、手品師の比喩で説明され、納得した。
- ・サブリミナル的効果（ます形、辞書形、一緒に教える）
- ・『みんなの日本語』練習B、Cを答え合わせで終わらせず、練習で活用すること。
- ・JSLカリキュラムの存在
- ・『みんなの日本語』は週1回のボランティアでは難しい。
- ・我々はまず「サバイバル日本語」を教えているのだということ。
- ・JSLカリキュラムの理論を聞いて、取り出し授業のやってきた内容（特に初期）は大きく間違っていないことがわかり、少し安心した。
- ・日本語を習得するのが容易な小学校低学年は、日本語で自我を形成するというもっと大きな課題があるのがわかり、よく考えると逆に怖くなった。
- ・JSLカリキュラムというものを初めて勉強した。子どもの認知能力に即した、丸ごと音による文型を感じてもらう方法であることを知った。
- ・我々の教えるのは「文法」ではなく「文型」である。文法は理論。文型として丸ごと理解してもらおう。
- ・「は」と「が」：何度聞いても興味深いテーマである。機会があればもっと深く講義を聴きたい。
- ・今までの授業の質問へ先生が回答してくださったこと。有意義だった。
- ・教育とは、①目標を定める②期限があり③目標達成に向けて計画を立てる④指導方法を決める、の4つが要件であること。
- ・体験（子どもに体で体験させ）→ 探求（体験したものを分析、気づき）→ 発信（気づいたことを日本語で表わす）、日本語を通じて学ぶ力をつける。
- ・「AUカード」について。
- ・Q&Aの説明の中で、理屈ではなく、使える日本語を教えることが大切と何度も出てきたが、本当に実感できた。

・「日本語を通じて学ぶ力を育てる」→ 難しいけれどとても重要なことがよくわかった。(日本人の子どもにも「学ぶ力をどう育てるか」が教育上で研究されているのは、それが難しいことだからと思った)

・日本語で人格を形成する時期(小学校低学年)がとても重要な意味を持つこと。

・JSLカリキュラムは子ども専用であるのか?

・「体験・探究・発信」の3つの局面で使われるAUが更に分類され、その分類の中でよく使うことばが整理されていたことが目から鱗ものだった。とても役に立ちそうだ。

・1つの言語が完成しなければその子どものアイデンティティーが形成されない。

・AUカードを使うということに興味を引かれた。

・『みんなの日本語』をいつも使用しているので、今度大人の日本語教室でちょっと試してみたい。

・子どもは理屈ばかりを要求しない。

● 「JSLカリキュラムの概要Ⅱ(教科志向型概説)」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

・6年「新しい社会」を使った教え方を実際に考えたこと。

・モチベーションを与えること。

・発問により相手の発言を誘発する。

・繰り返すことの大切さ。

・家族間の挨拶……外国の人達に聞いてみたい。

・「教科志向型」はとても興味があり、学びたい項目の1つだった。この時間内では足りない。もっと学び、今後の活動に繋がりたいと思った。

・グループ討論の時、「教科志向」ではなく「教科指導」の方法を考えがちになっていた。「教科志向」がわかっていないのに討論することに疑問を感じた。

・理解語彙と使用語彙の違い。日本人の子どもは理解語彙を多量に持っているが外国人の子どもは使用語彙と同数→教科書が理解できない。

・語彙量は知能と連動する。

・子どもは具体物から入らないとやる気が起きない。

・やさしい日本語に直して説明するだけでなく、その歴史的背景に相応しい表現は繰り返し練習し、覚えさせ、使えるようにする。

・先生が板書してくれた社会科の中で、必ず使うことばが本当に必要だと思った。

・子どもに発話を促す教え方。繰り返しのドリルをする様に。

・学習を支える「日本語力」を育てることを忘れないこと。

・「発問をいつも心がけること」が強調された。大切に身につけたい。

・「良い点を取れる」ようにヒントを与えることも大切である。

・難しいことばを教えることはいいが、翻訳になってはいけない。

・問答しながら学習を進める大切さ。

- ・「学ぶ力」をつけることが目的
- ・具体 ←→ 抽象 の違い
- ・実際の社会科を取り上げての教科志向型指導のポイントについて。
- ・理解語彙と使用語彙の数の差。外国人は使用語彙しか耳にすることができない。
- ・社会科の「多くの使者たちが海を渡る」という単元をどう教えるかについてのディスカッション。
- ・語彙数（理解語彙と使用語彙）の話が私にとって新鮮だった。
- ・日本語指導と教科内容の把握の問題が興味深かった。
- ・外国人の子どもの理解語彙と使用語彙
- ・「学ぶ力」の育成をすることに焦点が当たっていることに注目すべき、ということが印象に残った。
- ・日本の学校で学ぶ外国人と、日本語を指導する日本語教師の苦勞。
- ・使用語彙が多くても、学習の場では理解語彙がないと理解できない。
- ・「質問」ばかりではなく、「発問」することの大切さ。
- ・「教科志向型」のJ S Lカリキュラムの難しさ。
- ・モチベーションを作ってあげることの大切さ。
- ・結果重視を考慮したテストの扱いについては、本当に説得力があり、教え方のコツの一つを垣間見た。
- ・少しだけだが、教科そのものと、教科の先生が授業した時にわかるようになる基本的ことば、日本語力を養うこととの違いがわかった。
- ・子どもの日本語教育はアイデンティティーを形成する言語養成が必要だということと、子どもが教育を受け、考える力を養うこととがある程度共通する問題であることがわかった。
- ・「教科志向型」であって「教科型」ではない。
- ・「教科志向型」の目的は「学ぶ力」の育成である。
- ・「学ぶ力」は教科によって異なる。現場の先生はよくわかっているはず。
- ・資料（社会小6、歴史）を使って、授業をどうするかを討議がよかった。
- ・「教科志向型」というのは「学ぶ力」を育成するものである。教科学習の前提としている。
- ・学習に使う日本語を教えるための「AU」の見方。教科を教えるのではなく、日本人なら知っているであろう日本語（ことば）を教える。その為に必要な知識としての教科内容とキーワード。
- ・実際の社会6年の教科書の教え方。グループで話したこと。日本語指導と教科指導の違い。
- ・日本語を教えるということから常にどう切り込んでいくかが大切。
- ・「体験－探求－発信」のしくみ。
- ・AU一覧

- ・教える教科の内容把握はとりあえず押さえておく必要がある。
- ・学習者に反復練習させることと、発問することが大事である。
- ・理解語彙は学習する上で重要なポイントとなる。
- ・実際の教科書を使ってどのように教えるか。
- ・教科書を前もって見て、どのように指導するか、自分で勉強しなければいけないと思った。

● 「子どもの日本語教育に関するディスカッション」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

- ・的をしぼった話し合いの仕方の工夫
- ・タスク遂行型の指導方法
- ・「コミュニケーション場面と言語項目」というテーマでの話し合いでは、最近子どもと接する機会が少なく、今時の子どものことば使いで、いろいろな話が出て、面白かった。ただその中で、来日直後の子どもに学ばせたい表現に持っていくのは難しかった。
- ・チャンクというのは日常会話でよく使う表現のかたまりで、これをタスクやゲームで使いながら身に付けさせるということ。
- ・先生のご経験で、子どものことばの直し方が正確に伝わった。
- ・ふだん無意識に聞いている子どものことばが思い浮かばなかった。
- ・4人組でワークをした時の他の方の意見が新鮮に思え、一人で考えるより日本語を教える時は複数（2～3人）で教えられたら、とても良い授業になると思った。こういうワーク形式はとても良い授業だと思う。
- ・実際に子どもが使用している「話しことば」のバリエーションは、なんと多いのだろうとあらためて思った。
- ・同じ写真を与えられても、グループにより異なった会話ができ上がる。
- ・終助詞「よ」と「ね」の相違
- ・「にありますか」「にあります」「～ですか」「～です」「～ですか」「～ています」「～できますか」「～できます」など、会話の文型だけでも教えられる（内容は何でもいい）。
- ・あくまでも相手の子どもの本当に役立つ自分になること。
- ・「意図的に段階的に教えていく」ことばはあたりまえのとして分っているつもりだったが、プログラム作りにきちんと反映するのが、どれ程難しいか実感できた。細かいアドバイスが珠玉のようだった。いろいろ考えさせてくれる授業だった。
- ・個人では気づかなかった点を、複数のアイデアを出すことにより、同じ題材でもアイデアが広がると思った。
- ・場面によって表現を変えるということ。
- ・子どものことばの特徴
- ・チャンク（かたまり）の概念
- ・タスクの方法

- ・写真を見て、日本人の子どもの会話と外国人の子どもの会話を考える。
- ・場面に合わせた表現を教える。
- ・グループに分かれてのディスカッションで自分一人では考えつかないことがいろいろ出てくるのがわかった。
- ・子どもには「ひとかたまり」で覚えてもらうこと。
- ・ワークシートの扱い方（どんな場面で使うために、どんなタスクや教材を使うかを考える作業）
- ・ことばの習得に、場面の体験が大切である。
- ・外国から来た子ども達は友達ことば、学校用語ことばと何種類も憶えなくてはならないこと。そのことに理解を持っている大人が教育の現場においても少ない。
- ・初期指導はチャンクで教える。
- ・ことばの学習の中に自分で考えたり選んだりするタスクがあると効果的である事がよくわかった。つきつめてタスク活動を考えていくと意外と条件下では使えない単語が多いことがわかった。
- ・子どもの環境、いつ来日したか、級友とのかかわりなどによって、教えていくものに段階があることがよくわかった。
- ・場面設定では、友達同士と他の場合との 2 つのことば遣いに違いがあることをしっかり教えていくことが必要。これはいつも確認していくことが大切だと思いつた。
- ・日本人の自然な会話 → 教えたい会話
- ・初級段階の子どもたちへの日本語教育
- ・ある場面と実際の会話に出る文型の考察。日本人同士の会話をそのまま外国人の子どもたちに教えられるか。
- ・ふだんの会話の使用法を洗い出すことはとても勉強になった。
- ・チャンク（丸ごと表現のかたまり）を覚えることが大切。サバイバル日本語の必要性。
- ・日常会話とフォーマルな日本語とのギャップを埋める。
- ・場面を提示する重要性。
- ・ワークシート：場面作りがいかに大変かがわかった（学習者によって設定が違うので）。
- ・活動例と授業の展開
- ・みんなで考えるといろいろな場面が考えられた。

●「教室活動の実際(初級・模擬形式)」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

- ・アスペクト「ている」についての多義的用法について。
- ・ボランティアで教える場合（週 1 回のことが多いので）、先週のことを忘れていても、今週の新出項目を教えることができるよう、工夫することが大切である。
- ・文法でなく、情報が伝えられることが目的。導入のときは例文(役立つセリフ、使えるセリフ)を選ぶこと。

- ・無助詞格～助詞が消える現象で、日本人が使う場合は軽さを出すために使う。外国人が不注意で抜く場合とは違う。
- ・アスペクトは動作やでき事がどの過程にあるのか、動詞の後にことばをつけて表す。「～しかけている、～しつつある、～しそうだ」等。英語のアスペクトとは違う点もあるので注意すること。
- ・文型で文法を教える際は実際に役立つ、実用的な例文を用いること。
- ・『みんなの日本語』の練習Bは答え合わせではない。繰り返す口慣らしのドリルをする重要性。
- ・サバイバルの表現……実際の生活ですぐ使えるような表現を教えてあげられるように、例文選びが大事ということをいつも忘れずにやりたいと思う。
- ・役立つことばを使う（何度も言われていることですが）教科書の例文でも取捨選択する。
- ・テキストの「練習」は何回も繰り返し練習することが大事 → ドリル、口慣らし。
- ・丁寧なお辞儀の仕方（マナーとして参考になった）など、ノン・バーバルな表現の例。
- ・日常生活の中で、使える例文を示すことが大切。
- ・「無助詞格」という文法用語
- ・教科書の中の例文、練習問題文は良く考え、使い道や、学習者に本当に役立つものを選んで使うこと。
- ・『みんなの日本語』練習Bの使い方……繰り返して定着させる。スピーディーに、また、リズムカルに口から自然に言えるようになることが大切。
- ・自分の思っていることを正確に伝えるのに役立つ表現を身につけさせる様に学習者が使える例文を示す。
- ・ことばだけでなく、日本人のマナーを教える、習慣を教える。
- ・古語の「だ、な、つ、が」が「の」と同じ機能を持っていたとは驚き。「木だ物(くだもの)」「毛だ物(けだもの)」「目つ毛(まつげ)」「目な玉(まなこ)」等。
- ・必要性の高い文型を示して導入してゆくこと。
- ・『みんなの日本語』の練習Bの指導方法を再確認できて役に立った。
- ・文法の勉強に終わらない、実際の会話で役立つもの、覚えておけば使い途の多いものを教えることが重要だということ。
- ・役に立つセリフを教えねばならない。(前後に文脈を作っておく)
- ・辞書形(終止形)をサブノミナル的手法で残すのがよいこと。
- ・場面設定をうまくすることにより学習者にその意味・機能を感じかせるということ。
- ・導入に使うのに良い例文、悪い例文の実例。
- ・『みんなの日本語』練習Aの中で、どの文が会話の中で役に立つのか、見極める必要あり。
- ・『みんなの日本語』練習Bは、ドリル、口慣らしであり、答え合わせではない。
- ・使える日本語……「我がこととして用いられる表現」になることが大切。
- ・イントネーション、ノン・バーバル表現について。

● 「JSLカリキュラムに関する現状と課題」の授業で 特に印象に残った点としてあげられたもの

- ・日本の子どもとの違いは、日本語の力が十分でないためにドロップアウトする子が多いということ。
- ・大きくなってから日本に来た子は、学校教育が母語でなされているため、進学率が高い。
- ・一人の子どもを多くの支援者が多角的に見て教えていくことが重要である。
- ・教科書の学習に具体物を用意し、日本語を教えていくようにすること。
- ・グループごとに一生懸命取り組むこと
- ・自分の中にでき上がってしまっている固定観念に縛られてはいけないと気付いた。
- ・「長さ」を比較する例を示す場合は、同類の物を比較すること。
- ・教科の活動に日本語を入れていく。
- ・支援というのは、ボランティアと子どもとのやり取りの中で決まってくるもの。子どもが本当にやりたいものは何かで決まる。教えるときに子どもにとって何が残るかそれを考える。
- ・教科を通じて語彙を調べ、教えていく。算数について「長さの概念」も自分でわからせること。教科志向型 JSL カリキュラムの本質を知った。
- ・「JSLカリキュラムが実際の現場にあまり普及していない」ということが残念である。
- ・「子どもにとって楽しい活動になるように配慮し、そこにことばを乗せていく」ということが最も印象に残り、指導をする際に最も大切な事だと再確認した。
- ・グループで話し合っ、いろいろなアイデアを出し合うのが楽しかった。
- ・外国人の子どもが言う「(日本語ができなくて)学習が大変だ」と、日本人の子どもが言う「学習は大変だ」は「大変だ」の中身が違う。
- ・算数問題を把握→解決の計画を立てる→計算を実行する→結果を検討する。(算数問題解法の手順)
- ・グループ・ワークでの各グループの発表に対する先生のコメント。
- ・教科の活動の中に日本語を埋めていくということ。
- ・日本の学校での算数の進め方。
- ・その日に学習した結果として子どもに何が残るかを考えること。
- ・学習するさい、子どもに何か楽しさを与えること。
- ・先生の話し方が非常にはっきりしていて、かつ迫力があるため理解しやすかった。
- ・「読解力」「学習」。やり取りの中で言わせるということ。
- ・教科の活動に日本語を埋めていく必要性について。
- ・具体的で自分でやってみたりして体験で覚えさせることの大切さ。
- ・子ども達が喜びながら覚えていくことを大切にすることがとても実感があって、うれしく感じられた。
- ・各グループが長さのワークを選んでいたグループが多くて興味深かった。

・算数の「活動の意味がわかるように、活動に参加できるように」子どもに何を教えたらいいか考える事が大切である。学習したことで何ができるのか、何が楽しいのか、が重要である。

・具体物を利用することの効果。

・子どもが楽しめる授業をすること。

・JSLカリキュラムの現状が少しわかった。良く調べたい。(派遣先の小学校でカリキュラムの有無を聞かれたことがあるため)

・「子どもへの日本語」とよく言われるが、その子どもの今までの言語能力、今の環境など、大人と同じようには一括りにできないことに留意する必要がある。

・日常会話ができて教科の日本語に追いついていけない。それが子どもがドロップアウトすることになっていくということに関係者が気付いていない。

・JSLカリキュラムは、初期指導が終了してから行う。初期指導とは、どの程度のことを言っているかは明確ではない。

・教科そのものを教えるのではなく、概念や思考力を伸ばせるような支援をする。難しいができないことではない。

・「算数」で日本語の何が教えられるかを常に考えること。

・グループ・ワークは特に楽しかった。「他人のアイデア+先生の意見」がとても良かった。

・教科支援を考えなくては、子どもへの日本語教育は立ち行かなくなるということ。

・外国人の子どもたちの進学率がとても低いこと。

② 実施主体からの研修内容結果評価

a. アンケートの分析

・全体の印象については、「大変満足」が 62%、「満足」が 32% で、大多数が満足している。

・講座内容に関しては、先生の説明か、講座自体のレベルかは分からないが、「大変分かりやすかった」、「分かりやすかった」で 76% と過半数になっている。

・講座科目についても「興味を持てた」が 91% となっている。

・「教室の状態」、「授業の時間帯」、ともに過半数を超えている。

・ボランティアへの有益性について、「今後大変役立つ」と「役立つ」を合わせ、100%を占めたことは、大変良かったと思われる。

・スピーチ大会、教室見学、勉強会见学についても、ほとんど「大満足」と「満足」で70%を占めている。

・全体として、アンケートの数字からは、有益な事業であったといえるのではないかと。

・子どもの日本語教室の見学実習では、「やや不満」と言っている人が少数いるが、これはどういう理由が考えられるか。たぶん見学に行ったことは良いのだが、内容的に

自分の想像とのギャップが大きく(手法・教授内容など)、「やや不満」という表現になったのではないだろうか。

- ・アンケートに所属を書いてない人がいるが、記入欄に気が付かなかったようだ。
- ・「成人より子どもを対象にした内容が多かったような気がする」との意見があった。講座科目としては、半々にしたつもりであるが子どもの日本語教育関係の科目が後半に集中したのと、ワークショップ形式(参加型)などにより、子どもの内容の方が多かったように感じたのかも知れない。
- ・「3時間があつという間で、時間の長さを感じさせない講義だった」との感想あり。授業内容の充実を示しているようだ。
- ・「週2回で、少々きつかったが、中身の濃い講座でとても楽しく受講ができた」との感想あり。
- ・「近隣市との交流ができてよかった」との感想が多かった。(横のつながりができた)
- ・演習時のグループ設定がやや毎回固定してしまった感はある。
- ・全体的に、今後の有益性、役に立つという感想を持ってもらえたことは非常に良かった。
- ・全体の講座を通じて、受講者からあがった意見を、「満足した点」と「不満だった点」とに大別して一覧にすると、以下のようである。

満足した点	不満だった点
<ul style="list-style-type: none"> ・ アクセントの練習……缶を叩いてアクセントの高低を示したアイデアは大変参考になった。 ・ 音声と音韻の違いがよくわかった。 ・ 連体修飾詞に関する分類など新しい知識が得られた。 ・ ワードサラダの意味がわかった。 ・ 漢字の筆順の原則がわかった。 ・ 第一言語の習得と第二言語習得との関係と違いがわかった。 ・ ファンクションを重視したコミュニケーション・アプローチでの指導が必要だということが理解できた。 ・ 自文化の確立とアイデンティティーの確認のためにも核となることばを持たせるのが必要だということがわかった。 ・ 各市により対応(支援の仕方やシス 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 連体修飾詞に関して分類や用語が難しかった。 ・ 文脈指示の「こ・そ・あ・ど」の用法。明快な分類が難しく理解できなかった。 ・ 四つ仮名「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」の使い分けの説明がよくわからなかった。 ・ 中学生への指導は、小学生の指導と違いがあると思うので、中学生への日本語指導を聞いたかった。 ・ 教師が教科書の内容を知らなくても日本語指導ができるのだろうか。 ・ 評価法は、ボランティアで週1回少人数(1~5、6名)、または学校派遣で1対1の指導なので、必要性を感じられない。(効果的な評価の仕方があるのか)

<p>テム) が違うことがよくわかった。また、他市とのディスカッションで学校派遣状況がよくわかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビンゴのやり方や配慮の仕方など、具体的な講習だったので、学習に充分活かせると思った。 ・「読み聞かせ」の方法を具体的に教わり、今後の参考になった。 ・「四技能重ね塗り方式」の指導法が良くわかった。今後楽しく学ばせることができるように考えたい。 ・学年齢に合わせるのではなく、学習レベルに合わせた教科書を使うことが大切であることがわかった。 ・子どもの日本語教育でも、成人の日本語教育に通じるところがたくさんあり、参考になった。 ・偏差値、SP表の見方がわかり、興味深かった。 ・ディスカッションで、他市の方々と情報交換ができてよかった。 ・子どもの日本語指導は、「学ぶ力」を育てることである。難しいが重要なことであることがわかった。 ・「AUカード」がどのようなものか、具体的に教えてもらったので、理解できた。 ・子どもが楽しく学べるように、常にモチベーションを与えることが大切であるということがわかった。 ・子どもの日本語教育は、学習を支える「日本語力」を育てることが重要だとわかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「日本語の基礎力」とは、どの程度までをいうのか、どこまで教えたらよいのか、不明確だった。 ・「AUカード」を見て使いこなせないと思った。 ・「教科志向型」と「教科指導」の違いが難しい。つい教科指導になってしまう。 ・『みんなの日本語』という教科書を使って、どう会話表現を教えたらよいか、あまりわからなかった。 ・日本人の子どもの言い方の他に、本来外国人の子どもに教えた言葉の選び方について、もう少し説明がほしかった。 ・「学ぶ力を付ける」教え方を、もう少し教えてほしかった。 ・生活にすぐ必要な日本語の指導法をもっと知りたかった。
--	--

<ul style="list-style-type: none"> ・ 発問により、相手の発言を誘発し、日本語力をつけることが大切である。 ・ グループワークやそれぞれの発表で、今後の参考になるいろいろなアイデアが聞けたこと。 ・ 生活にすぐ使えるようなことばを教えるためには、例文選びが大切であるということがわかった。 	
--	--

b. 見学レポートの分析

【成人の日本語教室から】

- ・ 1部屋に8グループの島があり、賑やかで最初は勉強になるのかと不安でもあったが、結果としてはとても充実したものであった。
- ・ とても活気があり、ボランティア教師も学習者も熱心であった。
- ・ 2人のボランティア教師で指導に当たっていたが、連携がうまくいっていると思われるグループと、授業が不統一になるのでは、と思われるグループがあり、2人で指導に当たることの難しさを感じた、との感想があった。
- ・ 各グループのしきりに1つずつホワイトボードがあって羨ましかった。
- ・ 男性ボランティア教師がいないのが気になった。
- ・ 女性ボランティア教師ばかりで羨ましかった、との声あり。最近ほどの教室にも男性が多くなり、トラブルも増えているもよう(女性からの声)。男性と女性との協調にはいろいろと問題があるらしい。

【子どもの勉強会から】

- ・ 教室見学者は、おおむね好意的に見ていたようだ。
- ・ 授業では指導法に多くの工夫が見られた、コミュニケーションを良くとっていた、との感想あり。
- ・ ボランティア教師が家庭的な接し方でよかった、日本語というより、教科指導が主流であった、などの意見が多くあった。

3) 企画委員からの全体的な評価

【良かったと思われる点】

- ・ 週2回で、大変であったが、充実していて良かったと思われる。
- ・ 出席率も毎回高く、受講者の興味・関心が深いことが実感できた。
- ・ 講師陣の選出は、おおむね適切であった。
- ・ 地域が様々だったので、いろいろな人と交流ができたことが、特に喜ばれたようだ。

- ・授業内容は各講師の協力・熱意もあって、予想以上に充実したものになった。
- ・企画委員の業務はいろいろ大変だったが、途中から慣れ、おおよそ計画どおりに実行できた。
- ・この研修の特徴である「成人」と「子ども」に関する二種の日本語教育が、両方聞けて良かったとの感想が多かった。企画者としては企画設定に成功したと言ってよいのではないか。

【問題があったと思われる点・改良点】

- ・応募条件では、ある程度受講者の資格を揃えたつもりだったが、実際には、受講者の知識や経験に少なからぬ差があり、開講当初には授業についていくのに苦労している受講者も若干見受けられた。初めのうちは、やはり受講者のレベルを見極めながら授業を進める必要があると感じた。
- ・各講師に対する受講生からの質問が毎回のレポートに付言されたが、それら全てに回答することが時間的に無理であった(文書での回答なども考えるべきか)。
- ・ワークショップなどでのグループ分けが、毎回、同じメンバーに固定しがちであったことは、親交が深まるという点では良かったが、毎回同じ傾向の意見しか出ないことにも繋がった点があったことは否めない。ある時点で、メンバー変更をしても良かったかもしれない。
- ・受講者の研修講座に対する要望・ニーズ等を事前により詳しく調査しておいた方が良かったのではないかと、と思われる点もある(地域ごとに抱えている問題の所在がかなり異なっている点も考慮して)。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

毎年、松戸市が市長も参加しておこなっている「外国人市民懇話会」では、外国人から市へ多くの要望などが寄せられるが、最近の主な意見は以下のようなものである。

- ・日本語教育のさらなる充実。特に子どもへの日本語教育の充実
- ・外国人の子どもへの指導経験が豊かな教師らと情報交換会を開催すること
- ・子どもたちの出身国の文化を紹介できること

外国人の子どもに対する日本語学習支援事業においても、子どもの母国語（第一言語）をどう活かしながら第二言語としての日本語を学ばせるか、が大きな課題となっている。これまでの研究からは、

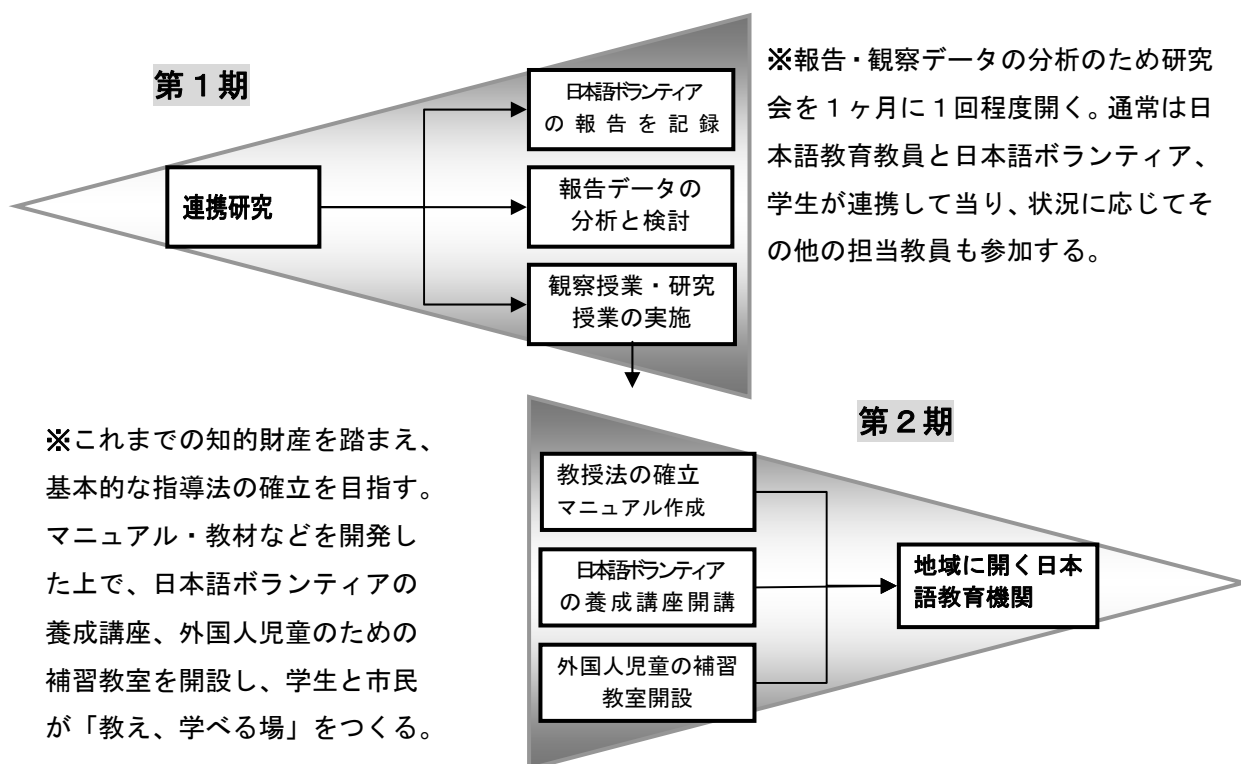
- ・子どもが母語を発することを否定しない。
- ・日本語教育の中で、時々子どもの母国およびその言語を話題にし、教師もその言語や文化背景を理解するよう努める。
- ・個人レベルからだけでなく、学校全体、社会地域との連携などの姿勢が有効である。

等のこと明らかにってきている。

以上の点を踏まえ、現時点で想定する聖徳大学言語文化研究所 B プロジェクトの取組計画を、大きく2期に分け、以下に図示する。

第1期 調査・報告を基軸にしての連携研究を中心とする教育を行なう。

第2期 第1期の成果を踏まえて、実際の教授法マニュアル作成、教科書等の教材開発。地域に開かれた養成講座、補習教室の開設を目指したい。



(11) 事業の成果

① 他事業との連携

今回の研修講座には、以下の団体からの応募があった。

我孫子市国際交流協会日本語教室
船橋市国際交流協会中央公民館日本語教室
地域っ子プロジェクト 東部公民館日本語教室
鎌ヶ谷市国際交流協会日本語ボランティア教室
流山市国際交流協会日本語講座
NPO 外国人の子どものための勉強会

柏市中央公民館日本語教室
松戸市国際交流協会日本語ボランティア会
野田市国際交流協会日本語教室
センシティ土曜にほんご学級
さくぶん org (ボランティア作文添削)

これまでも、聖徳大学言語文化研究所 B プロジェクトでは、JSL (Japanese as a Second Language=第二言語としての日本語) 児童・生徒のための日本語教育研究を、平成 18 昨年度から設置した報告者会議、研究班会議（主として松戸市教育委員会学校派遣員からなる特別研究員の研究組織）を中心に進めてきた。今回の研修講座開講を機会に、上記の諸機関・団体とより積極的な連絡を取り合い、今後も地域の実情に有益な共同研究を進めていきたい。

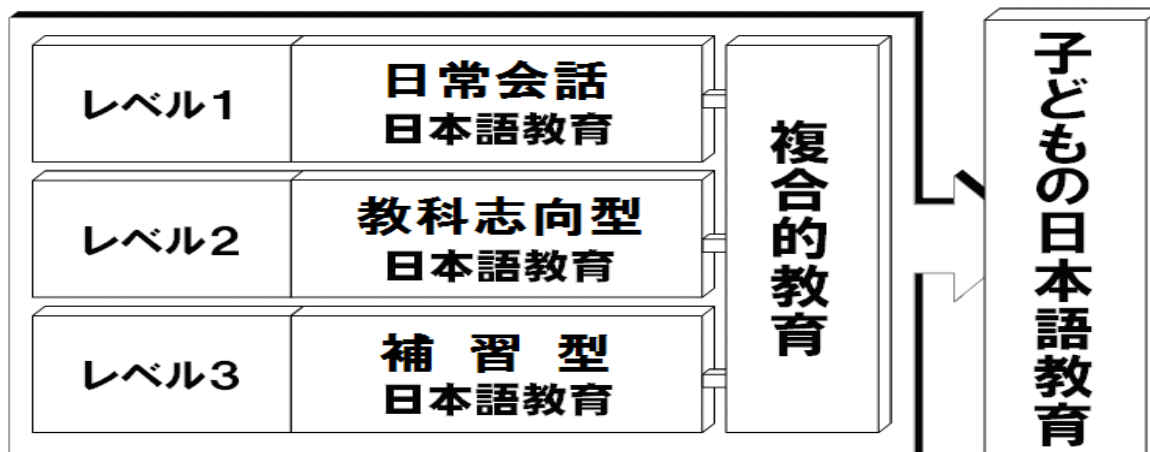
② 研修後の人材活用

今回の受講者の中から、今年度の聖徳大学言語文化研究所 B プロジェクト研究に参画してもらう人員を選定する計画である。

また、今回の研修講座を修了した受講者に履修証書を配付し、今後の個々人の活動が支援されるよう、各関係機関に呼びかけていきたい。

(12) 今後の課題

- ・この講座が各地域の現場で、どのように活かされることになるのか、追跡・確認することはなかなか困難である。今後も受講者と定期的に連絡をとるなどの手段を講じられないか検討中である。
- ・受講者の中から、研修が終わった後も、定期的に“クラス会”を開けないか、との声が出た。これは研修の成果をより活かすため、また、研修の成果を確認するよい方法ではないかとも思われる。
- ・この講座を次のステップにつなげるため、先に掲げた今後の取組計画に沿って、さらに研究会で検討していく必要がある。
- ・日本語支援学習が、ともすれば単なる家庭教師的な教科補助教育に終始する危険性がある。
- ・外国人に対する学習支援は、日本語教育ばかりでなく、学校生活支援を含めた多岐にわたるものであってしかるべきだが、日本語教育支援と他領域支援との弁別が曖昧であると、けっきょくいずれの支援も不徹底なものに墮する虞がある。本来の日本語学習支援との区別を闡明にするためにも、JSL カリキュラムのうち、特に教科志向型の具体的カリキュラム作成が急務であると思われる(以下概念図、参照)。



・今回の研修講座で大きく浮かび上がった問題の一つに、ボランティア日本語教室で教える日本語表現の「実用性」の問題がある。これは使用している多くの教科書が、構造シラバス、オーディオリンガル・アプローチの概念に依って編まれたものであるが故の問題でもあるが、構造シラバスによって構築された文型が現実場面でどのように扱われるのか、その実用性、有用性が明らかになりにくい傾向にあることは否めない。ボランティアが取り組むべき日本語会話の表現とは、まずはサバイバル日本語表現であるはずだが、機能面を重視した教育を施すには語用論的な発想に対する理解と機能的運用を志向する語学的センスが培われねばならない。

・今回の研修を実施して、ボランティアの現時点における成人と子どもの日本語教育では、それぞれ大きな課題となっているものに以下の2点があげられると考えられる。

- ①「機能シラバスによる会話指導の充実」(成人のサバイバル日本語会話のため)
- ②「JSLカリキュラム(教科志向型)の具体的運用」(単なる教科補習教育に陥らないため)

そして、かような方向にボランティア日本語教師の意識を促し、具体的な指導方法を示せる上級教師の存在が、どのボランティア団体からも要望されている。

聖徳大学言語文化研究所では、今後、以上の指導・助言を適切におこなえる上級教師の養成が急務であると考え、この取組に向けて研究・企画を進めていきたい。